

大正十一年三月五日印刷  
大正十一年三月五日印刷

Z32-B88

島崎村 島生馬 監修

# 金の船

式月號



第一卷  
第三號  
8.3.26  
国会図書館



抒情詩名作叢書第二篇 出づ

●特に年若き皆さんの、清く美しかれと希ひつ  
つ歌はれたる床しき詩集です。

抒情小詩  
寶石の夢  
水谷勝著

●少女畫報主筆として麗名高き水谷先生が優しく  
弱き少女の爲めに、胸ふるはせつゝ發表されたる  
處女詩集を先づ新春の机上に備へられよ

各冊珍箱天入金實價十九圓送各料五錢

抒情詩名 一篇  
作叢書第一 忽ち九版出來

西條八十先生著

静かなる眉

西條先生の詩品は優雅にして典麗なること當代  
稀なり。

島崎藤村先生序  
柳澤健先生著 (忽再版)

現代の詩及詩人

(四六版函入四百頁最本定價金二圓送料三錢)

●お父様やお兄さまへ御知らせして下さい本書は  
荷も新らしき詩を讀み詩を作らむとする諸士の必  
讀常備せざる可からざる空前の好著也。本書一度  
出で、我國並に西歐詩壇の一大鳥瞰圖を得。如し

發行 東京市神田區南神保町 尙文堂  
振替東京一九三四四

愈々發賣

沖野岩三郎新著  
西村アヤ子挿畫

繪入 頬白の歌  
童話

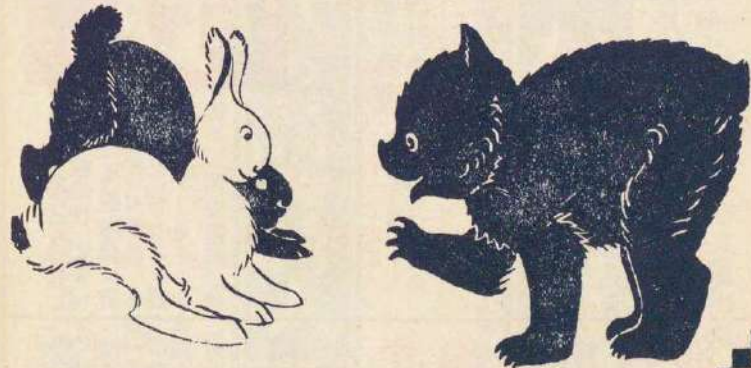
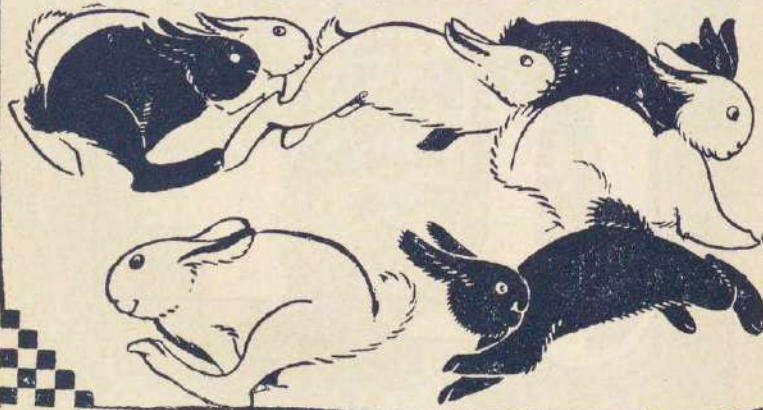
高い山の上に、紅や白の美しい花の咲亂れた、大きな不思議な樹があつた。  
其の枝には可愛い頬白が、「一筆啓上つきむき候……」の歌を、節面白く歌つてゐる。  
歌があんまり面白いで、花の下には種んな物が集つて來た。川から這ひ出た黒坊主  
熊のお腹から飛び出て來た赤ちやん、鼠の行列を見に行つて高い石垣から落つこちた  
小僧さん、腕に怪我して纏帶した小い栗鼠、大きなお腹を大鼓にして踊り疲れた古狸  
餘り歌が面白いで夫れに聞きとれて學校を遅刻した小學生……そして皆なが、聲を  
揃へて頬白の歌を面白くと言つた。本當に沖野先生の童話は面白くて可らしい。  
その可笑しき中に何時とはなく小供の心に正しき教を積み込ませるのも沖野先生の  
童話である。装幀や挿畫は十二才の天才西村アヤ子さんの手になつたもの、この綺麗  
な面白くそして有益なる本を世の慈愛深き親達にお薦め致します。可愛いお子さん  
の爲めに、賣れ切れぬ中に――

四口色裝價  
六繪調幀壹  
判三挿頰圓  
兩色畫頰七  
入版山麗錢  
拾七圓拾  
錢三十錢

東京市神田區南神保町 尙文堂  
發行 日本評論社出版部

目 次

雪すべり(表紙、石版刷)	岡本歸一
額の血(口繪、原色版)	野口雨情
象の鼻(曲譜)	馬場孤蝶
惡龍の閉口(童話)	岡本歸一
鏡國めぐり(長篇童話)	西條八十
支那伊蘇普物語	楠山正雄
壇の浦の戦(歴史童話)	窪田空穂
電氣仕掛け(ボンチ童話)	船橋重一
木の葉物語(推薦童話)	千葉新一郎
狐の尻尾(童話)	横山壽篤
諸國傳説童話	藤澤衛彦
波船(童話)	三宅房子
司(童話)	三木露風
鳥追船(童話)	長田秀雄
箒草(推薦童話)	長野桂子
一ツ目小僧(推薦童話)	空加藤辰
不老不死の國	齋藤佐次郎
探しに行った王子(童話)	野口雨情
日向葵(童話)	山本鼎選
眞田機識り(自由畫)	編輯部選
面白い人(幾方)	若山牧水選
白雲(幼年詩)	岡本歸一
通信	
挿繪	





Ruchi

額ひたいの血

岡本歸一畫

『あら、血ちが出てるわ』  
 少年せうねんが起き上あつた時とき、少女せうじよはびつくりして額ひたいの  
 血ちを拭ぬいてやりました。そして、自分おのれの髪かみに巻ま  
 いてあつた赤あかい頭布かぶとぬいをとつて、しつかり繻帶じゆんたいし  
 てやりました。その時とき、少女せうじよの黄きい細こい胸衣むねえの  
 上うへに赤あかい血ちが一滴ひとしずくほたりと落ちました。(難波船なんばふね  
 の四十七頁しじゅうしちへいを御覽ごらんなさい)



お様子愛す御家庭へ

牛歩池田永治先書

精巧極彩色石版十數度刷  
衣裝善美懸幅仕立テ函入

■ 卷軸全六幅

■ 定價金拾圓

# 標本掛圖 家庭動物園

文化生活と  
家庭裝飾の  
改善!

子供の好きな、凡ゆる動物を網羅した家庭動物園。子供の心に純真の藝術的感化を興ふるに格好の掛圖。來るべき國民の少年少女を指導啓蒙すべき活教材。文化生活を旨とする家庭には、善美盡せる好裝飾品。

## 新案 禁止 高級玩具 人形と動物

▲新案 人形と動物十六個分。■定價金七拾五錢 ▲送料八錢

## 新案 意匠 カード 小動物園 二枚折り

▲新案 箱入、二枚折りカード二十枚挿入。■定價金七拾五錢 ▲送料八錢

▲特價金八圓  
■荷造送料金五拾錢  
▲一幅賣 送料共  
■金壹圓五拾錢  
■實物見本として提供す  
印刷のキレイな厚紙を、適宜に切り、別につけてある紙を以て組合せると、皆さんの好きな、人形や動物が立派に出来ます。これまでに類のない手工應用のおもしろやです。

二枚折りカードの上段に、動物の擬が、あつてそこを開けると、獅子や象や鹿や、其他子供と親しみのある動物がいろいろと出ます。其下はそれら、面白い有益なお話になつて居ります。

子供は小鳥と同じやうに本能的に歌を話さないではゐられない人間です

毎月新譜發賣  
月報目錄進呈



# ニ采恋

新時代の要求に  
應ずる特別提供

金の船童謡  
吹込レコード

十五夜お月さん	鶏ささん	四丁目の犬	人買船	つばめ
---------	------	-------	-----	-----

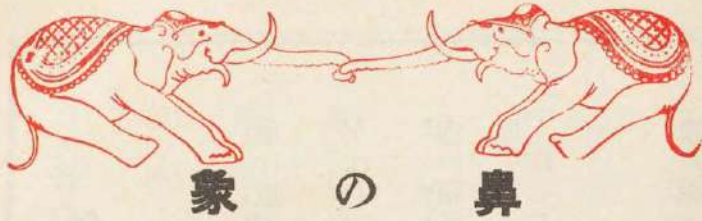
本居みどり子

其子供達に眞に面白く話すべき歌を  
與ふるのが此レコードの使命です。



株式会社  
日本蓄音器商會  
神奈川縣川崎町

發行所 東京神田錦町八四 象文館 三越白木屋 各書地 捌賣



本居長世作曲

0 5 3 2 | 3 1 2 - | 2 6 5 6 1 |

1. さ う に チヤ チヤ ー き ー セ た  
2. ザ ウ ニ ク ツ ー ハ カ ー セ タ  
3. さ う の め は ー ち ー さい が

2 3 5 6 | 3 - 2 1 | 2 3 5 6 |

ら う れ し が ろ ー ナ あ か い  
ラ ア ル キ ダ ソ ー ナ ザ ウ ノ  
ら ね じ た か ら ー ナ ん ぎ の

3 - 2 1 | 0 2 3 1 | 6 - 5 5 |

ば う し か ふ せ た ら う オ  
ア ー シ カ フ ト セ タ カ ラ  
は ー シ な が が い が ら

6 1 2 3 | 5 - 7 | 1 - 0 ||

ー れ ー が ろ ナ  
ー モ ー シ カ ろ ナ  
ー が ー く れ る ナ

版集嘶伽おな新清五

著生先村藤崎島

爐邊に一家團樂して、昔嘶や四方山の話話し合ふことはどんなに楽しい事であろう。もう其の時が来ました。一年の最も楽しいお正月が来ました。お父さんは子供達を集めて、自分が幼かつた時の、思ひ出ふかい山家の生活や山や川や林に就いての印象を、手に取るやうに語り出しました。その話が積り積りして本書は出来ました。何といふ懐しいお話でせう。みんな感じの好い、上品な、しみみりと落着いたお話ばかりです。藤村先生が今の文壇に重きをなして居ることは皆様の疾うに御存じの事ですが、お伽嘶の方面にも優れた技術を發揮して居られる事はまだ御存知ない方が多いやうです。先生は曩に佛蘭西へ遊ばれて、お歸りになると間もなく佛蘭西みやげとして新しいお伽嘶集「幼きもの」を発表されて、高尚優雅で一味清新な味ひを皆様へお願ひいたしました。出版しました此の「ふるさと」はその姉妹篇であります。今迄のお伽嘶と型の違つた、先生独自の境地を開拓された、もぎ立ての林檎のやうなお伽嘶を味ひ下さい。そして御子さま方へ読んで聞かせて下さい。どんなに喜ぶか知れません。小形のさつぱりした装釘です。



定價壹圓  
郵税六錢  
三六判美本

東京市京橋南船場町一三  
實業之日本社  
振替東京三二六番

著生先村藤崎島

版四十にのみき幼

本美判六三 銀六税郵 錢十七價定  
が者著たれば遊へ西蘭佛々遊てし我に後を達供子い幼の、四  
のもため集と々數の語物いしら珍のらちあてとに産土のそ

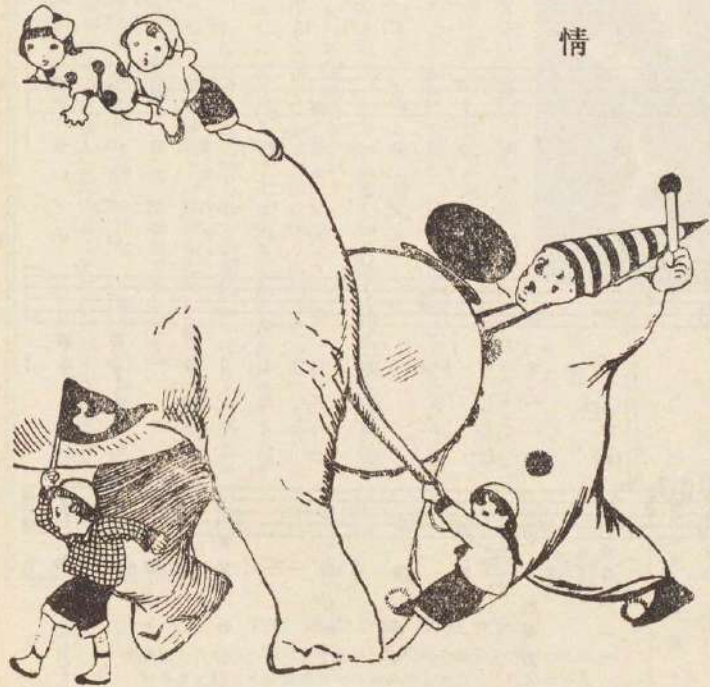
歩き出そナ  
 象の足 太いから  
 重たかるナ  
 象の目は 小さいから  
 眠たかるナ  
 象の鼻 長いから  
 日が暮れるナ



# 象の鼻

野口雨情

象に猿衣 着せたら  
 うれしがろナ  
 赤い帽子 被せたら  
 うれしがろナ  
 象に靴 はかせたら





# 悪龍の閉口

馬場 孤蝶



昔、昔、かういふ事がありました。これは全くあつたことです。若し無かつたのでしたら、此の話がある筈はありません。  
牛が牧場へと引き出され、豚が鼻で木の根を掘りながらさまよひ廻はるといふやうな或る村の外のとこに、小さい家が立つて居りました。そして、その家には妻のある男が住んで居ましたが、その妻は何時も悲しうな顔をして居りました。  
「おい、嬢、お前は何だつて何時も凋れた薔薇の蕾のやうに、下向いて、悲しうにして居るんだい？」

お前身體でも悪いのかい？」と、夫は或る朝妻に尋ねました。夫は又、かう云ひました。「お前は何も不足はない筈ぢやないか。何んでお前は他の女たちと同じやうに、陽氣にして居ることができないんだい？」

すると、妻は、「いえ、構はないで居てくださいよ。理由はきかないで居てくださいいませよ。」と、云つて、わつと泣きだしてしまひました。夫はそれは妻に理由を尋ねる折ではないと思つたので、黙まつて、仕事に出て行きました。

けれども、その男は妻の悲しうな様子が何うにも氣になつてし方がありませんでした。それで、二三日経ちますと、又妻の悲しうにして居る理由を尋ねました。でも、妻の返辭は矢張り前と同じでした。到頭、夫はもう何うしても、理由をきかずに耐へて居ることができなくなりましたので、もう一

度妻に尋ねました。すると、妻は夫の方へ向いて、かう云ひました。

「まア、貴郎。何だつて貴郎は此の儘にして置いてくだらないんですね？ 私か貴郎に理由をお話しますとね、貴郎も私と同じに悲しくなつておしまひなんですよ。本當に、何にも知らずにおいでなさる方が幾何ましか分らないんですがねえ。」

けれども、誰だつてもこんな返辭で満足する譯のものではありません。尋ねずに居ると云はれ、ば云はれる程、誰でも聞き度いと思ふ念はますます強くなるものです。

で、到頭妻はかう云ひました。「えッ、貴郎が何うしても話せと仰しやるんなら、私お話ししますですよ。此の家には好い運が廻つて來ないんです、寸毫も好い運が廻つて來ないんです。」

「それは何うしたことだね。お前の牝牛は此の村ち

うでの一番乳汁の出る牛ではないか？ お前の果實の樹は、お前の蜜房と同名じに、果實が一杯生るではないか？ 吾々の持つて居るやうな好い畑を持つて居る者が此の村で他にあるかね？ 吾々の家が不仕合せだなんて、お前がそんな事を云ふのは、何といふ馬鹿なことだ。」

かう夫は云ひました。

すると、妻は「え、それは皆な貴耶の仰しやる通りです。でも、私たちには小兒が一人もありません。」と答へました

其所で、夫のスタン・ポロオヴァンは成る程その通りだと気がつきました。成る程さう云へば、自分たち夫婦は運が悪いのだと気がついたので。その日から、その小さい家に住んで居る二人は、樂のない夫と樂のない妻となつてしまひました。夫が悲しうにして居るのを見るにつけ、妻はますます

す悲しくなつてしまつ

たのです。

さういふ風な有様が暫時續きました。



二

それから何週間も経ちましてから、スタン・ポロオヴァンは、自分の家から一日かゝれば行ける所に居た一人の賢い人に相談にと出かけました。スタンの行つた時には、賢い人は戸口のところにあつて居ました。スタンはその前に跪きました。「先生、私に何うぞ小兒を大勢お授けくださいまし。」と、云ひました。

「私に頼むには、よく氣を付けなさいよ。小兒が幾人も出ると、お前の重荷になりはせんかね。お前は、皆なに物を食はせ、皆なに着物を着せることが出来るだけの物持ちなのかね？」と、賢い人は答へました。

「いえ、先生、兎に角、小兒をお授けくださいまし。



どれ程でも、何うにかして育てますから。」と、スタンは云ひました。で、賢い

人が、それではもう宜しいから歸れといふ手眞似を  
しましたので、スタンは家をさして歸りました。

スタンはその晩方家へ歸り着きます時分には、疲  
れて、埃だらけになつて居ましたが、心は小兒がで  
きるに相違ないといふ望みで非常に楽しくなつて居  
たのでした。家の傍まで参りますと、大勢の聲がス  
タンの耳へ入りました。で、何うした事だらうと顔  
を擧げてよく見ますといふと、家の周囲はまるで小  
兒だらけです。花園にも小兒が一杯居れば、庭にも  
一杯居り、窓からも小兒が顔を並べて覗き出して居  
るのです。スタンには、まるで世界ぢうの小兒が皆  
なスタンの家へ集まつて來て居るのではなからうか  
と思はれた位でした。そして、その小兒は大きい小  
さいはなくつて、何れも此れも皆同なじ位の小さい  
小兒でしたし、何れも此れも負けず劣らず、喧しい、  
小うるさい、無遠慮な小兒でした。スタンはそれを

眺めて、それが皆な自分の子兒なんだといふことを  
知つて、全く慄へあがつてしまひました。

「これは大變だ。何といふ大勢なんだらう。何とい  
ふ大勢だ。」  
と、スタンは一人で呟きました。  
「えい、でも、一人も餘計な小兒はゐせんわ。」と、  
莞爾しながら、妻が出て來ましたが、見ると、その  
腰にも又幾人も小兒の群がかり付いて居るので  
した。  
妻は、その通り、小兒の大勢出來たことには驚き  
ませんでしたけれども、それでも、その妻でさへ、  
百人の小兒の世話をするには、流石に容易な仕事  
ではありませんでした。  
で、それから二三日過ぎますといふと、小兒たち  
はその家にある物を何も彼も皆な残らず食つてしま  
ひました。

「父親さん、お腹が空つた。お腹が空つた。」と、泣  
き立てるのでした。スタンは、それを聞いても、何  
うにもしようがありませんで、たゞ頭を掻いて、困  
り入つて居るのみでした。

スタンは、小兒が出來てからといふものは、日々  
の暮しは愉快でしたから、決して小兒が多すぎるな  
どとは思はなかつたのですが、唯それを育てる方法  
に困り果てたのであります。牝牛は乳汁が出なく

なりましたし、又、まだ果實の出來る時節にはなつ  
て居りませんでした。  
或る日スタンは妻にかう云ひました。  
「何うだらう、婆さん、何處へ行けば小兒たちの食  
ひ物を持つて歸へれるといふアテのある譯ぢやアな  
いけれども、兎に角、世間へ出て、何處かで食ひ物  
が手に入るか何うかやつてみるより外に仕方ない  
んだが。」



妻もそれより他にし方  
がないことを知つて居ま  
したので、その相談は直  
きにまともりまして、ス  
タンは、いよいよ、食ひ物  
を見付けにと出かけまし  
た。



ある日も皆と仲よく遊んで居たところを又「がき大將」こつんと食はしました。僕も負けてはゐないで、いきなり、そのひげへむしやぶりつきました。「はなせ」はなさないか「まだか、まだか」とごつんごつん食はします。其たんに僕の目からびかつつと火が出ます。負けずごらひの僕は、死んでもはなすものかと一生懸命がまんして、ぐんぐんそのひげをなぐればなぐるほど、ひつぱりましたので、さすがのおひげも僕のごうつくばりには、困ったんでせう。



のさげさん  
— 凶本歸 —

おひげの叔父さん、僕の大嫌ひな叔父さん、僕のことを「がき大將」がき大將」つてからかふので、僕もいつでもそのもつたいぶつた、大事そうなおひげをひつぱつてやるのです。するときつと「こつん」と、拳骨を食はせます。その拳骨のいたいのいたくないのつて、なみだが出るほどです。

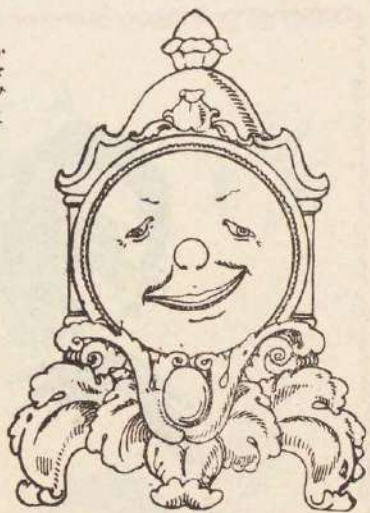


三  
いきなり兩足をつかんでそばにあつた新聞社の新聞を刷るインキの空樽の上へ僕をかかまにぶらさげて『どうだこれでもか、ぶちこむぞ、はなせ』あやまれ』とにらみつけて居ます。僕がをとなく遊んでゐるところをながつてをきながらあやまれもくそもあるもんかと、ぶちこまれたつてはなすものか、そんな事ならこうしてやるぞといきなり片手をインキの中へつつこんでその手でおひげをむしりました。

おどろいたのはおひげさん。



四  
僕を地べたへはをり出して逃げ出しました。『負けたらう。やあい』と、それでも勝つたので気がすみましたが、手がインキだらけです。水で洗つても洗つてもおちません。すなをつけるとよけいねばくして、しまひに手がびり／＼して、きものも、うでも、かほも、眞黒になつてどうしても、もうおちないのかと思ふとかなしくなりました。とう／＼お母さんに話しましたら大變叱られました。石油と石鹼で洗つてもらひましたらすぐおちました。



# 鏡國めぐり (長瀬重助)

## 西條 八十

### (二) 王様と女王

おもひもかけぬ鏡のなかへスツと抜けてはいつてしまったあやちやんはびつくりして、あたりをキョロ／＼見廻してゐましたが、まづ何よりも

先にこゝのストヴの中に火があるかどうか、氣にして覗いてみました。すると、そこには向の室とおなじやうに眞赤におこつた火がカン／＼燃えてゐたので、あやちやんはすつかりうれしくなつて、かうひとり言を云ひました。

「ちやあこゝも向ふのお室とおなじに暖かいわ。いゝえ、キツトもつと暖いにながひないわ。なせつてこゝのストヴでは、いつまであつてゐても、誰もあつちへ行つてこゝ用をしろなんて叱るものが無いんですもの。——まあ、それはきつと、みんながいまに外からわたしがこゝにゐるのを見つけて、そして入つて來られなかつたらどんなに面白いでしょう！」

かう云ひながら、あやちやんがなほもゆつくりそこら中を見廻しますと、この鏡のお室のなかは、

外から見るとところだけは格別變りがないが、そのほかの處はたいへん外と様子がちがつてゐるのに氣がつかしました。

まづストヴのそばの壁にかゝつてゐる公園の畫の額は、こゝで見るとその中の景色がどれも生きて動いてゐました。樹の葉はザラ／＼と風にゆれ、小鳥が翼を動かして飛んでゐるのが見えました。

それからまたストヴの棚の上の置時計（これは鏡の外からでは、表かはそのガラスのところしきや見えないのですが）の裏がには小さなお爺さんの顔がついてゐて、あやちやんを見るとニヤニヤ笑ひました。

「向のお室から見ると、こゝはよつほどお掃除が行きとゞいてゐないわ。」

あやちやんは、さつき向のお室で探したとき見たあたらなかつたトランプの札が、いま足もとの、ストヴの焚きつけ口のところに散らばつて落ちてゐるのを見つけて、かう考へました。さうして拾ひ上げようとして手をのばしましたが、思はず、

「アラ！」と聲

出して、驚いて、

ベタリと

そこへ坐つて了ひ

ました。どうで



しよう！トランプの札の繪がどれも皆抜けだして、手を引き會つてゾロ／＼歩いてゐるぢやありませんか！

「アラ、あすこにはダイヤの王様と女王とが歩いてるし（あやちやんはみんなをびつくりさせてはいけな）と思つて、わざとかう小さな聲で云ひました）こつちにはスペートの王様と女王が十能の柄に腰をかけてゐるわ。——アレ向にはクラブの水兵とハートの水兵が手を拱み合つて行くことよ。——みんなにはいつたいわたしはの聲がきこえないんでしようか？」

かう云ひながら、あやちやんは顔をズツと近く寄せてみて、

「アラ、ふしぎだわ。わたしの顔も見えないらしいわ。すのぶん妙なのねえ。」

と眩きました。

この時何だかキーツといふ軋むやうな物音が、あやちやんの耳もとで聞えましたので、フトその方を見ますと、さもいたづら／＼した顔のデョウカーが、ストロヴのこちらがはに立てかけ



た長い火掻棒の上を綱わたりのやうにして、面白さうに／＼り落ちてくるところでした。

あやちやんは、いたづらもののデョウカーが下へ来てから今度はどんなことを始めるだらうと楽しみにしてデツとその様子を眺めてゐますと、思ひがけない横つちよの方で、大した騒ぎがもちあがりました。

「アレー、あの聲はうちの坊やですよ！」

と、いまの音を聞きつけたらしいダイヤの女王がひどく驚いた風で、いきなり金切聲をあげました。さうして大急ぎで駆けだすはづみに、そばにゐた王様をストロブの灰のなかへ眞逆さまに突き落したのにも氣がつかず、

「可愛い、皇子はどこにある？ わたしの大切な百合の花はどこにある？」



と叫びながら、狂人のやうにそこら中を駆けまはりました。

「こ、こ、これは怪しからん！」

かはいさうに王様は落ちるとたんに何處かへひどく打付けたらしい鼻のあたまで撫で／＼、ひどく不機嫌な顔をして、ストロヴのブリキの圍ひの中から出てきました。まったく怒るのも道理、王様は顔から足のつまさきまでまつ白な灰坊主になつてゐました。



(三) をかした控帳

あやちゃん様の方はともかく、女王が気がひのやうになつてとんでもない方角を探しまはつてゐるのを見て、かはいさうになりました。そこであわてゝ女王を撮み上げて、いたづらものゝ、

デョウカールの傍へ持つて来て置いてやりました。女王はだしぬけに自分の身體が宙にぶらさげられたので、目を白黒し、手足をばげしくバタ／＼させました。下されてからも一二分の間は息がつまつて口がきけず、たゞ黙つてデョウカールの皇子を抱きしめてゐました。が、やつと心地がつくと、大急ぎで、未だに不機嫌なしかめ顔をしてストーヴの圍ひの上に立つてゐた王様に聲をかけた。

「あなた、氣をつけなさいよ、噴火ですよ！」

「なに？ 噴火ぢや？」

王様はビックリして、心配さうにキョト／＼足もとを見まはしました。

「たいへんな噴火ですよ。いまわたしはひどく噴きあげられて——」

女王は息をまだせい／＼させて、切れ／＼に、「ですから、あなた、チャンといつもの通りに路を歩いて来て下さい！ すこしでも踏みはずすと噴きあげられますよ！」

云はれて王様は、おつかかなビックリ、ソロソロリ、ストーヴの圍ひの縁を傳はつて、女王の方へ歩いてきました。けれどもあんまり歩きかたがの



ろく、まるで 蝸牛の匍ふやうなので、しまひには女王ちさすがに疳癩を起して、  
「まあずるぶん遅いんですねえ！ そんな歩きかたぢやこゝへ来るまでに日が暮れてしまひますよ！ なんならわたしが引つて引つばつてあげましょうか？」

と、どなりました。

けれども王様は、たゞもう恐さがいつばいで、女王の云ふ言葉なんか耳に入らないらしく、相變らずソロリ／＼とやつて來ます。

今度は見てゐたあやちゃんの方が、ぢれつたくて堪らなくなり、矢庭に手を出してまた王様の身體を撮み上げました。しかし今度はせい／＼氣をつけて、前の女王の時よりもづつと静かにもち上げ、息がつまらぬやりにソツと宙をぶらさげて、



女王の傍へつれて行きました。それでもあやちやんは途中で王様がまだ灰だらけであるのに気がついて、フー／＼口で吹いて、そこら中の灰をきれいに落してやりました。



見えない大きな手で掴まれて、生暖かい息の風をまともにフー／＼吹きかけたときの、王様の顔と云つたら、悲しいと云はうか、をかしいと云はうか、それは／＼珍々無類な顔つきをしました。あまりの驚きで聲を立てることも出来ずたゞその眼と口とがだん／＼大きく、だん／＼まるく開いてゆくばかりでした。あやちやんはあんまりをかしいので思はず手先がふるえて、危く王様を落つことしさうになりました。

それでもやつと静かに、王様を女王のそばの床の上に置きますと、王様は今度はグタリと仰向けにねたつきり、身動きもしなくなりしました。

「アラ大變なことをしちやつたわ。」

と、あやちやんはそれを見て急に心配になりました。何かそこらに顔へかける水でも無いかと探

し廻りましたが、やつと見當つたのはインキの罫だけでした。せめてこれでも」と思つて、あやちやんが、それを持つて戻つてきて見ますと、——いつの間に息を吹きかへしたか、王様は女王とコン／＼話をしてゐました。ふたりともひどくものに怯えた様子で、聞きとれないほど小さな聲でしきりに囁き合つてゐました。

「なんといふおそろしい噴火ぢやらう。それに少々暴し雨がまじつてゐたやうぢやよ。あゝ、恐わ、髪の毛のさきまで冷たくなつてしまつた。」これは王様の聲でした。

「ですからあなた、このことは早速控帳につけて置いた方がよござんすよ。」と、女王が勧めました。

王様が服のかくしから大きな控帳をと



り出す様子を、あやちやんは面白さうにヂツと眺めてゐました。王様は鉛筆のさきを舐め／＼何か書きつけようとししました。

この時あやちやんの胸に、フトわるいたづらが浮びました。あやちやんは王様のうしろへ廻つて、肩のところへ突き出てる長い鉛筆の先をチヨイと搦んで、王様のかはりにスラ／＼と手帳へ

字を書き始めました。

かはいさうに王様は、鉛筆が自分の思ふ通りに動かないので、ひどく弱つた風で、いろ／＼に力を入れて動かさうとしてゐました。けれどもあやちやんの力の方が強かつたので、たうとうへトへトにくたびれてしまひ、

「女王や、わしはこれからもうすこし細い鉛筆を使ふことにする。この鉛筆はどうも使ひ難うてならん。見やれ、この通り、わしが書かうともせぬことが書けてくる——」

と、さも情なさうに云ひました。

「とにかくお見せなさい。」

と、女王は手帳をのぞき込んで、あやちやんが書いた文句を、聲を出して讀みました。

「王様ころんで灰だらけ、

吹いて

も吹いて

もまだ落

ちぬ」

「まあ」

と、女

王は見



なり肩を逆だて、

「どうして陛下はこんな下品な唄をおかきになつたのです？」

「どうしてと云うたつて——」

と、王様はひどくドギマギして、

「わしは、もちろんこんなこと書かうとはせぬ。第一國王の威厳に關する。ちやが、どう云ふものか、自然にこんな唄が書けたのちや。まあ今日は、何といふ不思議なことはかりある日ぢやらう。」

王様、女王は互ひに太い溜息をついて、黙つたなりししばらく顔と顔を見合せてゐました。

あやちやんは少々自分のいたづらが過ぎたので、きまりが悪くなりました。

それに、

吹いて

も吹いて

もまだ落

ちぬ」

「まあ」

と、女

王は見

「早くこの氣のお國をのこらす見物して置かないと、今にも、向のお室でお母さんが呼ぶかも知れない。」と云ふ考へがフト胸に浮びましたので、王

様と女王との間着はこのまゝに残して、今度はまづ庭の方の様子を見て來ようと思ひ立ちました。

さう思ひ立つと同時に、ふしぎやあやちやんの身體は、いつの間にか、家の階段をフワ／＼宙に浮くやうにして、庭口の方へと、下つてゆくのでした。

(あやちやんは庭

でどんなふしぎ

なものに逢ふでせ

う?)



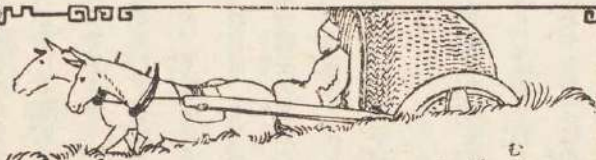
(クバツ)

# 支那イソップ物語

(七)

楠山正雄

## かまきりの斧



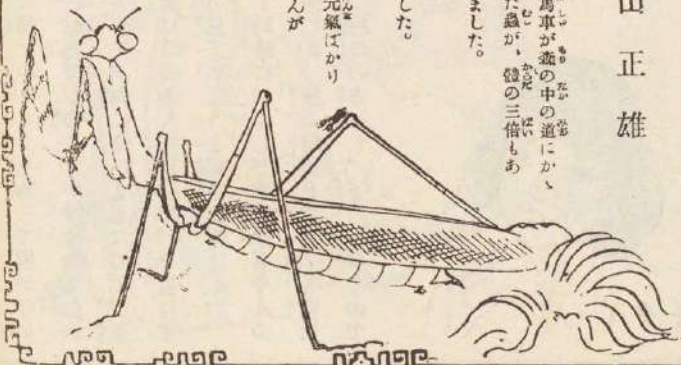
むかし或國の王様が、大勢家来をつれて獵においでになる途中、王様の馬車が森の中の道にかゝり、草むらの中から一匹、春のひよる高い、目ばかりひからした蟲が、體の三倍もある餘をふり上げて、いきなり王様の車なめがけて打つてかゝらうとしました。

王様はふと車の上からごらんになって、びっくりして御者に、「あれは何といふ蟲だ、大そう元氣のいゝ奴だね」とおききになりました。

御者は笑つて、「陛下、あれはかまきりといふ小さな蟲でございますが、あの通り空元氣ばかりいゝ奴で、すゝむことを知つて遠くことを知りません。自分の力もかんがずに、相手かまはずあの通り向つて行く馬鹿な蟲でございます。」と申し上げました。

王様はお聞きになつて、「いや、これが人間の仲間だつたら、二人とない勇士になるにちがひない。さういふ勇士にはこちらからよけなければならぬ。」と仰しやつて、車なよけて通せました。

向ふみずの人間は、こちらからよけて通る外はありません。



## あかぎれの妙薬



むかし宋の國にあかぎれの妙薬を、先祖から家傳で傳へてある男があつて、家中水に手足をつけてもふしぎにあかぎれもしもやけもできないといふので、代々布さらしを商賣にして、細いくらしを立てゝゐました。

その話をよそから聞き傳へた男が、或日百圓のお金をもつてやつて来て、これでその家傳の妙薬の製法を賣つてくれと頼みました。

布晒しの男はさつそく親子兄弟の會議を附いて、いろ／＼相談をした末、いくら布晒しの商賣を毎日せつせとかせいで、百圓といふお金のとれる見返はないのだからといつて、とう／＼薬の製法を百圓で賣ることになりました。

ちやうどその頃奥の國と越の國とは合戦の最中でしたが、百圓で赤きれ薬の製法を買つた男は奥の國へ出かけて行つて、王様に願つて水軍の大將にしてみらひました。

折から冬の寒空で、敵軍の兵隊は大抵手足を揃めて弓矢も鐵砲も振ることができないのに、こちらは赤きれの妙薬のおかげで、元氣よくすん／＼進んで行つて、とう／＼戦に勝つて越の國を亡ぼしてしまひました。

赤きれの妙薬を賣つた男は、その功で奥の王様から華族にとり立てられました。同じ技で、道具でも、他の方一つでちがふものです。



# 壇の浦の戦

後篇

窪田空穂



身方は負けたと見ると、知盛は小船に乗つて、急いで、安徳天皇のお召しになつてゐるお船へ参りま

といつて高い聲で笑ひますと、女房たちは、

「何だつて今、御冗談なぞをおツしやるのです。」  
といつて、みんな泣いたり騒いだりしました。

二位（清盛の妻）は、もう前から、さういふ時があらうと覺悟をしてゐましたので、知盛の言葉聞き  
ますと、神璽（三種の神器の曲玉）を脇に挟み、寶劍（三種の神器の劍）を腰に差して、天皇を抱きま  
わらせて、

「自分は女ではあるが、敵の手に懸つて死ぬやうな  
ことはしない。これから主上（天皇）のお供を申す。  
殉死をしようと思ふ人たちは、急いで續きなさい。」  
といつて、静かに杖、歩み出ました。

主上（天皇）は御歳は八つでした。御歳の割より  
も大人びて入らして、御姿が美しく、あたりも耀く  
やうでした。垂らして入らつしやる御髪の毛が黒く  
ゆら／＼とお脊中に波を打つてゐました。主上は不

して、

「もう駄目なやうです。見苦しい物はみんな海へ棄  
て、船の中を掃除をなさい。」

といひまして、自身でも、掃いたり拭いたりして、  
船の中を走り廻つていそがしく掃除をしました。

女房たちはそれを見て、

「あ、中納言殿（知盛）、軍の模様は何んなです、何  
んなです。」

と尋ねますと、

「おツつげ珍らしい關東男を御覽になることでしよ  
う。」

思議さうな御様子で、

「尼御前（二位殿のこと、尼になつてゐたから）私  
を何所へ連れて行かうとするのだ。」と仰いました。

二位は幼い主上の御顔を見て、涙をハラ／＼と落  
しまして、

「あなたはまだお分りになりませんか。尊い因縁で、  
あなたは天子としてお生れなさいましたが、悪い因  
縁で、もう御運が盡きてしまつたのです。第一に、  
東の方へお向き遊ばして、伊勢大神宮に御暇を遊ば  
せ。それから西へ向つて、御念佛を遊ばせ。この國  
はつらい所でございます。あの海の底には、塚樂と  
申して、結構な都がございます。そこへ御案内いた  
します。」

主上は御涙をこぼされながら、小さな、美しい御  
手を合せて、東へ向つて、伊勢大神宮、正八幡宮に  
御暇を申され、更に西に向つてお念佛を遊ばします

と、二位は、  
「波の底には都がございます。」と慰めて、抱きまゐらせて海へ沈みました。今までそこに見まゐらせた主上の御姿は、忽ち波に隠されてしまひました。

二

主上のこの御有様を見ると、母后も、今は最期の時と思はれて、硯、焼石（體を温める爲のもの）などを御懐に入れて重みを附けられ、海へ飛び込まれましたが、その時はもう源氏の侍がそこまで亂れ入つて居まして、その一人が、御髪へ熊手を懸けて引き上げてしまひました。大納言佐局は、内侍所（三種の神器の鏡を入れた櫃）を持つて海へ飛び込もうとしましたが、袴の裾が舷にかゝつて倒れてしまつたので、取押へられてしまひました。教盛、經盛の兄弟、資盛、有盛の兄弟、それに従弟の行盛も加は



つて、兩方で見合つては泳いでゐるのでした。それを伊勢義盛が見て、小舟を寄せて、熊手で引上げてしまひました。

三

教經は、今日が最後の日だと思つて戦ひました。

つて、何れも體の浮びあがらないやうに、鎧の上に碇を脊負ひ、そのうへ手を組合つて海へ沈んでしまひました。

宗盛は、一番先に死ななければならぬ人ですが、それが出來ずに、舷の所へ立つて、あちこちと見廻してゐました。平家の侍は、いかにも意氣地がなれと思つて、宗盛を海へ突き落しました。それを見ると、宗盛の子も海へ飛び込みました。この二人は、體に重い物を着けてもゐないし、それに水泳を知つてゐるので、その邊を泳ぎ廻りながら、宗盛は、子が沈んだら自分も沈もうと思ひ、子は、父が沈んだら自分も沈もうと思



矢のありたけを射て太勢の者を射殺すと、今度は、大太刀と大薙刀を持つて切つて廻りました。知盛がそれを見て、  
「餘り罪をつくり給ふな、よい敵でもないやうです。」といふと、經教は、  
「それでは大將と組めといふのですか、心得ました。」

と云つて、何うかして義經と組まうと思つて探し廻りました。しかし、義經の顔を見知つてゐないので、いゝ鎧を着てゐる者を見懸けると、それかと思つて飛びかゝつてゆきました。

義經は、成るべく教經に見られまいとしてゐましたが、その中に教經は、義經の乗つてゐた船へ乗つて來まして、それと目をつけて飛びかゝりました。義經は組んでは叶はないと思つたのか、持つてゐた薙刀を左の脇に挟み、をりから身方の船は二丈ばかり

りも離れてゐたが、それへひらりと飛び移つてしまひました。教経は、さうしたことは出来ないと思つたのか、追はうとはしませんでした。



三〇  
教経は、もうこれだけで止めようと思つたのでしよう、持つてゐた太刀も薙刀も、鎧甲までも海へ捨て、しまつて、大手をひろげて大聲に、

「源氏の方で、我こそと思ふ者は来て教経と組んで生捕にしろ、鎌倉へ下つて兵衛佐(頼朝の事)に一言いはうと思ふことがある。さあ来い。」と云ひましたが、寄つて来る者がありませんでした。それを見たのは、安藝實光といふ二三十人ある侍で、同じ程の力のある家來を一人連れてゐました。實光の弟も一しよに居ましたが、これも大方の者でした。

「能登殿(教経)が幾ら強くても、我々三人で懸つたら、何んな鬼でも退治ができる。生捕にしよう。」といつて、自分たちの船を寄せて来て、教経の船 乗り移ると一しよに切つてかゝりました。

教経はそれを見ると、一番に懸つて来た實光の家來を蹴つて海へ落してしまひました。そして續いてかかつて来る實光とその弟とを兩方の脇の下に抱いてしまつて、

「イザ己等、冥土の供をしろ。」と云つて、一しよに海へ飛び込んでしまひました。教経はその時二十六でした。

#### 四

知盛は、見ていゝだけのことは、皆見てしまひました。もう自殺しようと思ひました。それで家來の伊賀家長を呼んで、

「ふだんの約束通りにするか。」といひますと、

「無論でございます。」

と云つて、家長は、知盛に鎧を二ツ着せ、自分も同

じやうにして、手を組合つて海に沈みました。そこに居た二十人ばかりの侍も、みな續いて海へ沈みました。

#### 五

源平の最後の戦は、全くこゝで終つてしまひました。

海の上には、そこへ投げすてた平氏の赤旗や赤印が一面に漂つて、まるで地に散つた秋の紅葉を、風が吹き散らしたやうに見えました。

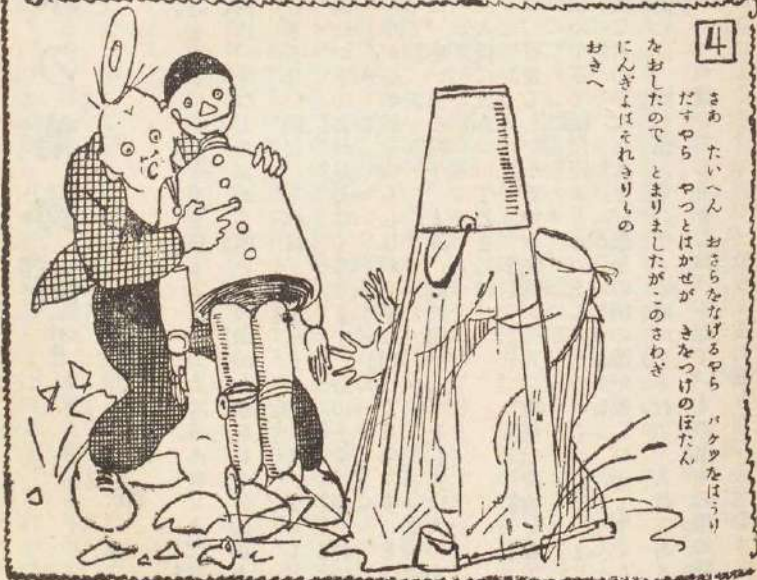
汀に打ち寄せる白波は、血潮がまじつて薄紅くなりました。

今は乗つてゐる者のない平氏の空の船は、潮に引かれるまゝに、風に吹かれるまゝに流れて、何所へ行くといふあてもなく海の上に搖られてゐるばかりでした。(長篇歴史童話「をばり」)



3

おわてたのでぼたんのうへをほかり  
ほかり……



4

さあ たいへん おさらをなげるやら バケツをほうり  
だすやら やつとほかせが きなつけのぼたん  
をおしたので とまりましたがこのさわぎ  
にんぎよはそれきりもの  
おきへ



1

あるほかせが こんなでんきかけのにん  
ぎよをはつめいしました ぼたんによつて  
いろ〜 のことをします。  
たりますので ほかせもおくさまも火よりこび あつちの  
ぼたんをおしたり こつちのぼたんをおしな  
しけんにつかつ  
てみると おさ  
らなしたり  
おさらをあらつ  
たり ふいたり  
ながくよくほ  
たりますので ほかせもおくさまも火よりこび あつちの  
ぼたんをおしたり こつちのぼたんをおしな



2

そのうちにちよいとぼた人を おしまいがへたら にんぎ  
よがくりとうしろをむいて いきなり ほかせをつかまへて  
かほをぐいぐいふきだしたので おくさまびつくり そばにあ  
つたひしやくで おにんぎよをほかり〜

## 木の葉物語

(推薦)

千葉新一郎

三四



秋も半を過ぎますと、小鳥も兎も猫もそれから人もみんな、まだ目が醒めない内に、すつとこゝから遠い北の山から来るものがあります。夜の明けきらぬ間に、それは忙はしく働いて、明るくなるといつの間にかその姿が見えなくなりませう。野の上や、森や林の中を、緑色の車が金の鈴を鳴らしながら駆け廻つてゐるのです。その緑色の車には、赤い色の帽子、上衣、靴の同じ装をした六人の小人が、前に三人後に三人ついてゐました。

車の中には、可愛らしい小さいお姫様が一人、桃色の着物を着ていろ／＼な秋の千草で編だ座ぶとんの上に坐つていらつしやいました。紅葉の様な右の手には大きい象牙の柄の筆が握られておました。その両側には、赤い色と黄色い色の液が、それ／＼入れてある銀の皿が、一つづつ置いてありました。そして、その象牙の筆の穂先をその皿の液にふくませては、一枚々々木の葉をす早く色彩りな

さいました。さうして何千何萬枚と立所に黄い葉や赤い葉が染められました。かうやつて野から林へ、林から森へと、夜の明けぬ内に、六人の小人はその緑の車をせつせとひき廻るのでした。

お日様が「お早やう」と、笑ふ時にはもうちやんと、北の方の水晶の御殿へ歸つて、お姫様はスヤ／＼眠つておいでになりました。朝早く起きてごらん下さい。小人が流して行つた、真珠の汗が露になつてキラ／＼輝いて草の葉なんかにつかつてゐます。それから林や森や野を見てごらん下さい。木の葉がそれは／＼美しく色彩られてゐますから、榎や楓は真赤に、銀杏は黄く染められてゐます。お姫様はかうやつて、冬の半まで毎晩々々熱心にお働きになるのです。でも、なにしろ木の葉は千も萬も、もつと／＼たくさん、とても数へ切れない程あるものですからいくら早くつても、お姫様の力ではやつぱり緑の葉が残るのです。でも仕方がありません。お幼さいのですから。

秋の世界をかうやつて美しくして、私共人間は申すに及ばず、小鳥や犬や猫までも喜ばして下さるお姫様は、本當に親切なやさしい方ですねえ。だがまだ誰も、お姫様を知らないのです。それで誰



三五





になると、かうやつていちわるをするのでした。何んてひどい婆さんでせうね。

水晶の御殿のお姫様は、これには本當に困つてしまひました。でも何うすることも出来ないで、悲しくつて泣いてばかりいらつしやいました。冬になると婆さんのいちわるは、益々げしくなつて来るのです。おしまひには美しい木の葉をば、全部吹き落してしまふのです。

お姫様はどんなに、悲しかつたでせう。冬の間は殆んど泣いていらつしやいました。皆さん、冬になると雪と言つて真白い花びらが、ヒユウ／＼と冷い風が吹いた後なんか、よく天から降るでせう。あれは水晶の御殿のお姫様の涙が氷つたのですよ。天國の庭のお花が散つて来るのだと思つては、いけませんよ。火に暖めてごらん下さい。直ぐ溶けて涙になりますから。

皆さんの中で誰か、あのいち悪のお婆さんがもう今度から、お姫様を苦しめない様に相談して下さる方はありませんか。さうしたならば、お姫様はどんなにお喜びでせう。そればかりか、あの秋の美しい木の葉は、いつまでも落ちないこととせう。(おはり)



三六

が一體、木の葉をあの様に美しく染めるんだらうと思ひ議に思つておました。けれども六人の小人の外にもう一人知つてるものがありました。

水晶の御殿よりも遙かに北の方の、冷い海の上に浮いてる水の御殿のおそろしい、いやな顔の黒い婆さんなのです。口をばかうやつてとがらしながら、息を吹き出しますと、ヒユウ／＼と薄氣味の悪い、寂しい音と一緒にそれは／＼冷い骨までも氷りさうに思はれる位の風が起きるのでした。この黒い婆さんはお姫様をもとから大變に嫌つておました。ことにお姫様が、毎年秋になると木の葉を染めていらつしやるのが、氣に食はないのです。始終後から邪魔をするのでした。

「あ、綺麗々々、お、美事々々」と、言つてみんなが賞めちぎつてゐると、そろ／＼邪魔しにやつて來ます。三本足の鳥が黒い車に乗せて、夕方になるとやつてきます。そして例の通り、口をとがらして、「ブウツ」と、息を吐き出します。すると「ヒユウ／＼」と、氣味の悪い音と一しよに冷い風が吹いて來ます。さうすると美しい木の葉が、それに觸れてバラ／＼と、落ちるのです。毎日夕方

## 狐の尻尾

横山壽篤



私のお爺さんのお爺さんの其又お爺さんのお友達に、久左さんといふお爺さんがありました。久左さんは或年、奈良に嫁入つてゐる娘の家へ御年始に行つて、婿殿から大層美しい狐の皮を貰つて歸りました。久左さんはこの皮を腰にきゆつと巻きつけて、其上から道中着を羽織りました。

「これは好いものを貰つた。私は冷え性ぢやからこれで大きに助かるといふものぢや、有り難い、」と獨語をいひながら、伏見の近くまで歸つて來ました。大分足も疲れたので、駕か馬にでも乗つて行きたいと思つてゐると、丁度道端に一挺の駕を下して休んでゐる駕屋がゐりましたので、

「もし、駕屋さん。」と聲を掛けました。

「へい旦那、何處まで。」ともう駕屋は心得て駕の戸を開いて待つてゐました。

久左さんは駕に乗つてから、

「ぢや、稻荷橋までやつてお貰ひ申しませう。」といひますと、駕屋はやつこらさと擔いで、はい、はい、はい、はいと急ぎました。

やがて駕屋の掛聲がとまつて、駕は其處に置かれました。駕屋は、

「へい、旦那参りやした。」と駕の戸を開けてくれました。

「はいはい、もう稻荷橋ですかい、早いことぢや。」と久左さんは駕から這出しました。

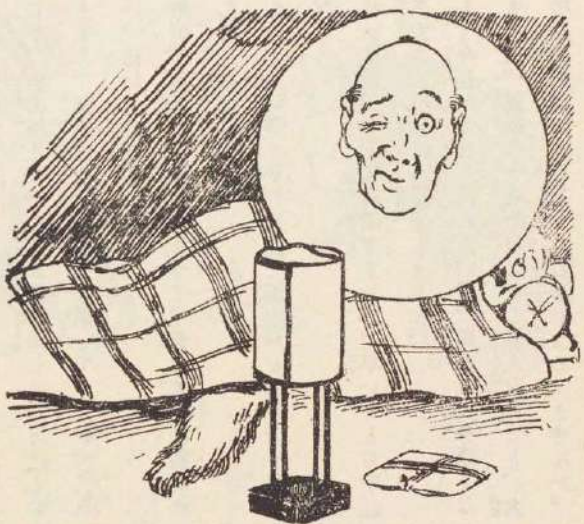
もう今しがた日も西に入つて、四邊は大分暗くなりました。駕屋の一人がひよいと客人を見ると、大きな尻尾が後にぶら下つてゐるではありませんか。

「や、御苦勞御苦勞、處で幾程上げたら好いかな。」と久左さんは懐に両手を入れて、鞆の財布を掴み出しました。

駕屋同士は先刻から、目つきで知らせたり、手ぶりで話したりしてゐましたが、急に其所へ土下座をしました。

「ど、ど、ど、どう致しまして、お代などは頂かなくとも宜敷う御座います。どうも有り難う御座いました。」と一人が地べたに頭をすりつけると、一人も「よう御乗り下さいました。有り難う御座いました。私奴には子供が七人も御座ります、どうぞ家内安全、稼業繁昌なやうに御利益を御願ひいたします。」と云つて、ベコ／＼おちぎをしました。

久左さんは呆氣にとられて了ひました。財布に手を突込んだがり、とばけた狐のやうな顔をして口も利かずに突立つてゐました。



駕屋は代を貰はぬ上に、幾つも〜おちぎをして、コン〜と逃げるやうに駕を擔いで行きました。久左さんは、「はてな」と首を捻りました。

の中へ入れて、腰の邊へつけて眠りました。久左さんは、大きな軒をかきました。ぐうう、ごろ〜。ぐうう、ごろ〜。ぐうう、ごろ〜。暖かで心持がよかつたのです。

旅籠の亭主は、客人の立出つ時間を聞いて置かうと思つて、久左さんの室の戸口まで来ました。すると、もう大きなびきが聞えます。ぐうう、ごろ〜。ぐうう、ごろ〜、ぐうう、ごろ〜。亭主はそつと室の内を覗いて見て、びつくりして尻餅をつきました。客人の室には消えかゝつた古あんどんが、枕元においてありました。そして蒲團の端から大きな尻尾が出てゐました。狐の尻尾を見つけた亭主の目には、どう見ても客人の顔つきが狐にそっくりでした。

「まるで狐につまゝれたやうぢや。」と、つぶやきました。

云ひおくれましたが、久左さんの顔つきは幾らか狐に似てゐたと云ふことです。

久左さんは二歩三歩あるいてから、何やら足に觸るものゝあるのに氣づきました。「帯が解けたな。」と思ひながら手を後に廻すと、狐の皮が手にふれました。捻ぢ向いて見ると、大きな狐の尻尾がぶら下つてゐるのです。

「あ、是れぢや！ 私を狐ぢやと思つたのぢや、はは、は、は、は。」と、可笑しさを堪へ兼ねて笑ひました。

そこで久左さんは、尻尾の見えないやうに、毛皮をしつかりめかへて、旅籠に就きました。

其夜、久左さんは旅の疲れで、早く床に就きました。元來が冷え性なので、土産に貰つた狐の皮を床

あくる朝早くのことです。久左さんは床の中で頻りと煙にむせました。道理で、目をあけて見ると、室中煙なのです。

「これはしたり、どうしたことぢや。」と久左さんはもう苦しくて寢てゐることが出来ませんでした。跳ね起きるとすぐ、

「もし〜。コン、コン、コン。」物を云はうとして咳が出ました。その咳がどうしたことか狐の啼聲のやうだつたのです。

もしや火事ではあるまいかと、久左さんは氣づかひました。そこで内所を覗いて見ると、青松葉をどん〜くすべてゐるのです。久左さんは又、

「もし〜。コン、コン、コン。」と物を云はうとして咳をしました。

久左さんは小さい荷物を手早くまとめて、狐の皮を腰に巻きつけて、その見えないやうに道中着を

羽織つて、煙にむせながら、上りはなまで駆け出しました。家の中には誰もゐません、煙が一ぱいです。久左さんは仕方なしに、約束だけの旅籠代を紙に包んで其處へ投出すが早いか、おもてへ駆出ししました。それでも久左さんは、



「左様なれば、御亭主、えらい御世話を掛けましたの。」と挨拶しました。けれども誰も返事をするものはありませんでした。

久左さんの家は、伏見から十里の餘もありました。一日がかりで歩いて、やつと見られた田圃道までもどりました。

久左さんはいろんなことを思出しながら歩きました。そしてはたと膝をたきました。それは旅籠で狐と間違へて、青松葉をくすべたのだと思ひあたつたからです。

「これは面白い、どれ日も暮れたやうだ、狐の尻尾で、子供等をびつくりさせてやらうかな。」と久左さんは、今度はわざと狐の尻尾を後にぶら下げました。すると、行くての道端にあかりが一つ見えます。「はてな」と久左さんは考へました。其家は一ヶ月ばかり前に移轉したきり空家になつてゐる筈なのに、火

が見えるのです。

近づいて見ると、全く誰か人が住んでゐます。而も店にはお菓子だの、稻荷餅だの、大福餅だのを並べて、見たことのあるやうな無いやうな、娘さんが只た一人店番をしてゐました。

久左さんは中をのぞきながら挨拶しました。

「はい、今晚は、お寒いことぞ。」

「お寒う御座います、さ、お掛けなさいまし、お茶もよく出てをります。」と娘は大層な愛嬌ものでした。

狐の尻尾をぶら下げた久左さんは、遠慮もなく茶店へはいりました。そしてわざと狐の尻尾を茶店の娘に見せるやうにしました。お菓子和大福餅と稻荷餅とを鯛腹たべた久左さんは、土産にするのだからと言つて、大福餅を竹の皮に澤山包ませました。

「私の家はつひ先の杉林ぢや、あのそれ赤い鳥居が澤山ある家ぢやから、お代はとりに來て貰ひませう

かな。」と久左さんは甘いことを云ひました。

「はい、お代などは宜敷う御座いますとも、毎度どうも有難う御座います。お大切に左様なら。」と茶店の娘は眺へ向きの返事をしました。久左さんは甘くいつたので、ほく／＼もので家に歸つて、

「さあ、皆お出で、今度は大層な土産話もあるが、先づお土産を開いてから、ぼつ／＼お話しをするとしよう。」

と竹の皮包みを開くと、中から瓦の缺が澤山出てきました。

「こいつは變だぞ。」

と久左さんは腰をさぐつて見ると、どこへ落したのか狐の皮がありません。久左さんがあくる朝茶店まで行つて見ると茶店も何もありません、矢張貸家札がはつてあつたと云ふことです。(んはり)



# 諸國傳説童話

## 藤澤衛彦

### 八百姫

ある地方の村人の四五人が、或時、不思議な異人の宴會に招かれて、妙な、怪しげな御馳走にあづかりました。然し、同席の人は、誰も、その御馳走を氣味悪がって、箸さへし付けませんでした。驚く時、何と思つたか、其中の一人の男が、その御馳走の少しばかりを、そつと紙に包んで持つて歸りました。今

歸つたよ。まあ、これがその恐ろしいおみやげだ。と、其男は歸るなり、留守の者に出してやらうかとも思ひましたが、やつぱり、食あたりでもすると面倒だと思ひ直して、ボーンと、そのまゝ、欄の上に投上げて置きました。翌朝になつて、其家の小娘が、それを見付け出し、何だかおもしろい物だと、一口食べてみますと、ほんとに甘かつたので、少しも残さずに食べてしまひました。ところが、その知らずに食べた物といふのは、人魚の肉でしたので、それから其小娘は、少しも年を取らず、百歳二百歳の老人になつても、常に若々しく、何時でも十五六の小娘でをりました。



### 吉田銀杏

かうして、人魚の肉を食べました功德は、若々しい小女のまゝ、千歳の壽命を保つことが出来る筈でありましたが、八百歳の時、あと二百年の壽命を、その國の殿様に譲りました。彼女は、不思議なおのれの命を終りました。八百歳まで、少女の姿でゐられたといふので、少女は、その後、八百歳明神と祭られ、

八百比丘尼と稱へられてをります。今でも若狭國にはその遺跡がございますし、能登國には此八百姫の植まつたといふ白樺の林がございます(若狭と能登の話)

……御遊戯でござる、納屋の隅にても苦しいござらぬ故、……と、繰返して願つたけれど、もう、取合ふ様子も見えませんでした。據るなく其處を辭した旅僧は、石方定めぬ旅路を見やりながら、「あの森の大銀杏の葉も、今宵は皆落ち盡してしまふぞ。そして明日は雪だ、……遠途の旅の身は悲しい、どれ、早く宿を求めませう」と、寒さうにつぶやいて、とぼと歩みをつゞけるのでした。

その翌朝、吉田の里には、稀なる大雪が降つて、あたり一面の銀世界となりましたが、不思議な事には、ただ、旅僧(其旅僧は弘法大師であつたと言はれてをります)の足跡と思はれる幾點々が、曉の村外れを、戸隠の方へつゞいてゐたさうです。それから、毎年毎年、吉田の銀杏の葉が落ち盡しますと、きつと、里の邊には、白く白く雪が積るやうになりました。

杏林とするやうになりました。その日には、きまつて雪が降ります。(信濃の話)



### 佐夜の中山夜啼石

東海道金谷宿の西、小夜中山街道の道傍に、卵の形をした大きな石が祀られてをります。この石が夜夜悲しい聲を出して泣くので其名があると言へられてをりますが、それについてをかしい話があります。

今から二百五十年ばかり前まで、中山久延寺の近くに、俗に夜泣松と呼ばれる古木があつて、此松の葉を燃して、その光りを見せる小兒の夜泣が止るといふので、土地の人の信仰を得てをりましたが、其後落雷のために此松は枯れてしまひました。ところが、丁度その邊にあつたのが今の夜啼石で、其頃は、ただ丸石と呼ばれてゐたのみに過ぎなかつたのでした。それを、夜泣松が枯れた後、難いふとなく夜啼石と呼び出し、この石は大地の底から生へ抜いてゐる石だなどと評判しました。すると、寶暦九年夏の日の事……通りかゝつたのは、數十人の願禮同者でした。おもしろ半分に、提へてゐた棒で其石を動かしてゐるうちに、夜啼石は割れ上げられて、ころころと轉び出しました。そんな悪戯をするや天罰がたらどころに來るからと種々に言つて制められたにかゝはらず、たうとう割れ上げてしまつて同者達は、暫く経つても何事もなないので、どつと笑つて行き過ぎてしまひました。其後、久延寺の坊さん達の命令で、石は再び元の處へ取められましたが、石の位置は昔と大分變つてしまひました。小兒の夜泣を止めた夜泣松に附會られた佐夜、中山夜啼石の由来、さつとこんなもなんのです。(遠江の話)



## 難破船

三宅房子

四六

もういく年か前のことです。イギリスのリヴァプールから、イタリヤのマルタへ行く船がありました。その日は今にも暴風雨が来さうな空模様で、水夫たちも今晚はとて眠れまいといつておりました。

その船の三等客の中に、十二になるイタリヤの少年がゐりました。古びたマントを着て、ちつと何か考へこんでゐるやうでした。

そこへ一人の水夫が出て来て、

「マリオ、お前のお友だちをつれて来たよ。」といつて、ちぢれ髪の美しい少女をつれて来ました。少女はギウリエッタ・ファツギアニといつて、やつぱりイタリヤの生れでした。

二人はかうして會ふことから、もう幼馴染のやうに親しうに話しあひました。ほんとうにこの船の中には、この二人のほかには誰も話しあふ人がなかつたのです。

「君はどこへ行くの？」とマリオが聞きました。

「あたしはマルタへ行つて、それからナポリへ行くの。」

「父さんや母さんはあるの？」

「え、あるわ。あなたは？」

「僕はないんだよ。」

二人の子供の話は、何よりも先づ自分たちの身の上話から始まりました。少年のお父さんといふのは、一週間も前にリヴァプールで亡くなつたのです。そこで、その領事が少年の故郷であるバレルモには親戚にあたる人がゐるといふので、そこへ送つてくれることになつたのです。少女には両親もありませんが、お金持の叔母さんにつれられてロンドンへ行つてゐたのです。ところがその叔母さんが五六ヶ月前に馬車にひかれて亡くなられたので、やつぱり領事の世話になつて故郷へ歸るところでした。

「父さんや母さんは、あたしがたんと遺産をもらつて歸るだらうと思つて待つてゐるのよ。だけどあたしは一文もいたゞけなかつたの。」と、ギウリエッタがいひました。

「どうしてもらへなかつたの？」

「どうしてだかわからないわ。」

二人は一日話しあつてもなか／＼あきがきませんでした。

水夫のいつてゐたやうに夜になるにつれて海はだん／＼荒れて来ました。乗客たちはいつもより早く寢床へはいりました。二人の子供も立ち上つて、

「お休みなさい。」といつて、めい／＼の寢床に行かうとしました。と、その時はげしい波のしぶきが来て、少年はばつたり前へ倒れました。

「あら、血が出てゐるわ。」

少年がやうやく起き上るや、少女はびつくりして

四七

とびつくやうに抱きついて、額の血を拭いてやりました。そして自分の髪に巻いてあつた赤い頭布をとつてしつかり縋帯してやりました。その時、少女の黄ろい胸衣の上に赤い血が一滴ぼたりとおちました。

「ありがたう。もう何ともない。」

「さう、ではお休み。」

「お休み。」

二人が眠りつかないうちに、恐ろしいあらしがとう／＼やつてきました。たちまちのうちに一本のマストをへし折つてしまひました。甲板にあつたボートや帆桁をまるで木の葉のやうに吹きとばしてしまひました。

船の中では大騒ぎを始めました。叫び聲や、泣き聲や、祈り聲があつちでもこつちでも起つて一晩中ごつたがへしをしてゐました。

夜があけてもあらしは止みませんでした。山のや

救助艇はいく艘もいく艘も出されましたが、みんなあとから／＼沈んで行きました。



うな波があとから／＼おしよせて来て、甲板にある物は何一つ残らず海の中へ抛りこまれてしまひました。

そのうちに、潮が洪水のやうに船の中に流れ來んで來ました。

「ボンブにかゝれ！」と船長が大聲をあげて命令をくだしました。水夫たちは一せいにボンブにかゝりました。けれどなか／＼おつつきませんでした。水はどん／＼はいつてくるばかりで、乗客はなだれをうつて一等室の方へ逃げて行きました。

「船長！ 船長！ 助かりますか！」といふ聲が皆の口から出ました。しかし船長が、

「もう駄目です。どうかあきらめてください。こいつた時に、一人の女は『ヒヤ』といつて氣絶してしまひました。あとは誰一人聲を出すものはありませんでした。

甲板の上では、母親は我子を胸に抱きしめて泣いてゐました。友人たちはお互に抱きあつて別れをづけてゐました。なかには、海を見るのがいやさに、ピストルで頭をぶちぬいて死んでしまふ者もありました。どこを見ても死人が狂人のやうな顔ばかりでした。

マリオとギウリエッタはちつとマストにとりついたら、海を見つめてゐましたが、まるで死んだ人のやうにばんやりしてゐました。

そのうちに海はいくらか静まつてきましたが、船はもうよつほど沈んでゐました。

「大ボートをおろせ！」と船長がいひましたので、最後のボートがおろされました。それは水夫や乗客ですぐ一ぱいになりました。と、一人の水夫が、  
「船長！ お乗りなさい。まだ一人乗れます。」といつてすゝめました。でも船長は、

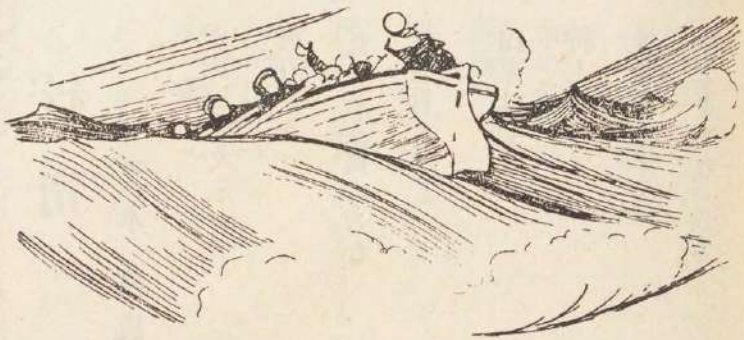
「わしはこゝで死ぬんだ。」といつてどうしても聞きませんでした。

「まだ一人乗れる！」とまた水夫が叫びました。

「それでは女を乗せるがいゝ！」と船長がいひましたので、一人の女がひよろ／＼と出て來ましたがボートを見おろすと急にこはくなくつて、甲板にたふれてしまひました。ほかの女たちはといふと、みんな死人のやうになつて、自分から助かりたいといつて出る者もありませんでした。

「ちや子供だ。」と、船長がいひました。

この聲を聞くと、さつきから死



「小さい方だ！」

と、水夫はたまりかねて叫びました。

「行つてしまふぞ！」とまた叫びました。

「ギウリエッタ

さん、あなただ。あなたはお父さんもお母さんも

あるんだから、あなたお乗りなさい。」と、マリ

オは美しい聲をばりあげて叫び

人のやうになつてマストにだきついてゐた二人のこどもは急に生きかへつたやうに、船べりへとんで行きました。

「僕だ。」

「あたしを。」

二人は今まで姉弟のやうに話しあつてゐたことも忘れてお互につきのけながら我れがちに乘らうとしました。

「小さい方だ。」と水夫が叫びましたので、ギウリエッタは電光にうたれたやうに立ちすくんで、マリオを見つめました。マリオも一寸立ちとまつてギウリエッタを見ました。と、そのとき少女の黄ろい胸衣についてゐる赤い血が少年の眼にとまりました。すると少年の胸のうちには尊い考がひらめきました。「さつき僕は救つてもらつたのだ！」と思ふと急にボートへとび降りることを思ひとゞまりました。

ました。「この子が軽いんです。」

マリオがギウリエッタの體を抱くなりボートへ抛りなげますと、ボートは本船をはなれて、さかまく浪の中をすゝんで行きました。

「さよなら。」

「さよなら。」

悲しい言葉が双方からかはされました。その間にも船はだん／＼沈んで行きました。

やがて、少年は膝をついて、両手を合せてお祈りをしました。少女は遠く離れて行くボートの中でし

せんに両手で顔をおほうてうなだれました。少女が再び顔をあげて眼を見ました時には、

浪はだいぶ静かになつてゐましたけれど、水平線上には遂に本船の姿を見ることができませんでした。少女は、悲しさが一時にこみあげて來て、どつと聲をあげて泣きくづれました。(をほり)



# 行司

三木 露風

山羊と洋犬とが

角力とる

どつちも負けるな

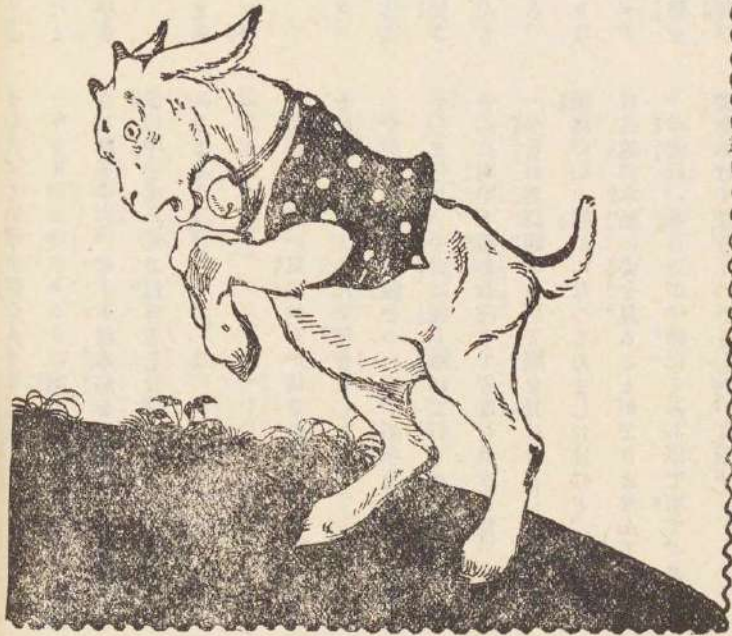
どつちもつよい

山羊は額で

押してゆく

洋犬は下手で

のどを咬む



どつちもまけるな

どつちもつよい

秋の眞晝の

農場の

羊の小舎は空いてゐる

洋犬の木箱も空いてゐる

行司に立つた

小童

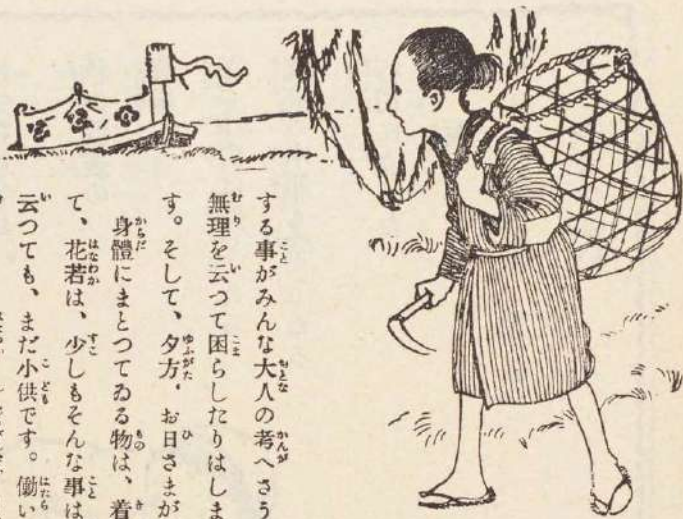
どつちもまけるな

どつちもつよい



# 鳥追船

長田 秀雄



六  
 その翌日から花若の素振は、すつかり前と違つてしまひました。まだ十歳になつたばかりの小供ですが、する事がみんな大人の考へさうな事ばかりです。花若は、もう決してお母さんに甘へたり無理を云つて困らしたりはしません。朝はまだ暗い内に起きて、山に柴を刈りに出かけます。そして、夕方、お日さまがすつかり隠れてしまふまで歸つて来ません。身體にまどつてゐる物は、着物と云ふのば名ばかりの襦袢でした。他處の子供と違つて、花若は、少しもそんな事は氣にかけません。たゞ、せつせと働きました。併し、何と云つても、まだ小供です。働いても働いても母子二人が満足に暮らしてゆくだけの事に出来ません。花若は始終貧乏に苦しめられてゐました。日暮らしの里は大きな河に添うてゐました。

この邊は一體に稻の穂を喰ふ小鳥が多い處でしたから、秋になると、百姓たちは大さわざをして、鳥を追ふために、流れに添うて、船をこぎ下し、その中で笛や大鼓で、はやしたて一生懸命にさわざ廻ります。その音に驚いて、稻田に下りた小鳥の群が、パツと飛立つのです。中には小船に鳴子を仕掛けてがらがら音をたてながらこぎ下る者もあります。知らない人が来てみると、秋の收穫が近くなるにつれて、船の数が段々増して来る賑やかな様子は、まるでお祭のやうです。

その年も、もう收穫が近づいたので、里では鳥追船を仕立てる仕度をはじめました。田が千町畑が千町と唄はれた。若の家でも、お父さんのゐらつしやる時分には、毎年、召使ひの者などが、船をしたて、鳥追ひに出かけたものです。腹黒の左近の尉に、すつかり田畑をかすめ取られてしまつたので、

この四五年は、花若母子は他處の鳥追船を見て、羨やまはしいと思ふだけです。

月の光のさし込む見かげもない破屋に座つて、淋しく都のたよりを待つてゐた花若母子は、今日から左近の尉の家の鳥追船が出たといふ話をし合つては、口惜し涙にくれてゐました。花若は今朝山へ行くとき、大きいの舊の召使たらが、お酒に酔つて、面白さうに、大きな船に乗つて出かけるところに出合つたのです。河の岸につないだ船には、白と紅と目のさめるやうな幕が張りまはしてありました。その中には、いろいろな御馳走が、並べてあるので

その船も紅白の幕も、もとは皆花若の家の物だつたのです——黙つて唇をかむでみてゐる内に花若の眼には、一パイ涙がたまつてきました。花若は急いで山へ入つて芝の上に倒れて長い間泣いてゐたの

です。その話をきいた奥方は、花若の手をしつかり握つて、

「ねえ、花若、どうしてお父さんは歸つてきて下さらないんだらうねえ。私はこの頃では、たゞもうお父さんが恨めしくなつてきたよ。あゝ、また明日から毎日賑やかにはやし立て、河を下つてゆく左近の尉の家、鳥追船の笛や大鼓の音を厭でもきかなきやならないんだねえ。」

と、かう云つて、涙をこぼしました。二人は一晚まんじりともしないで、不幸せな身の上を歎きあひました。

七

二人の悲しみも知らないやうに、夜が明けると、また明らかな秋の日が静かに映してきました。花若が鎌を持つて山へ芝刈に出かけやうとするとき、珍らしくも、左近の尉がやつてきました。どうせろく



たゞせば  
主人に違  
ひないが  
お前の亭  
主が、つ  
まらない  
訴訟に引  
かかつて  
都へ出て  
から七年

な事ぢやないと思つて母子が眼を見合せてゐますと左近の尉は、にこにこして

「今日は少しお前たちに頼みたい事があつて来たのだ。他でもないが、お前たちも、たゞかうしてぶらぶらしてゐては退屈だらうし、それに少しでも金の取れる工面をした方がいいから、一つどうだ。家の船に乗つて鳥追をしてくれないか。」と、かう切出ししました。

「え、鳥追ひ」と、奥方は思はず烈しい聲でき返しました。すると、左近の尉は、急に眼を怒らして「鳥追をするのが嫌だと云ふのか。」と、どなりつけました。奥方は

「あんまりだ。あんまりだ。」と血を吐くやうな聲で叫びながら、そこに泣伏してしまひました。

「何だ。あんまりだ——一體お前たちは誰のお蔭でこんな破屋にでも住んでゐられるのだ。成程、荷を

も八年も、何不足なく暮らして行けたのは一體誰のお蔭だ。そりやお前たち母子の云には不平もあるだらうが、併し、妻子を打棄りばなしにして都へ出てしまつて、七年たつても八年たつても歸つて来ないものを、いくら俺だつて、さういつまでも便々と養つてゐられると思ふか。よく考へてみたら、俺の恩がどの位深いか馬鹿でない限りは、分る筈だ。手が足りない時に鳥追くらいしてくれるのは當前ぢやないか。それも只使はうと云ふのぢやなし相當の賃金で雇はうと云ふのに、さう不平を並べるなら、よし。もう、容赦はしない。此處の家から追立てるから、さう思ふがいい。」

花若はこの傍若無人な言ひぐさをきいて、齒がみをしましたが、もとより賢い兒ですから疑乎と腹の中で耐へてゐました。



何と云つても弱い女と小供です。もし、本統にこの家を追い出されたら、それこそ明日から野伏せりになるより他には仕方ありません。そこで花若は泣入る奥方の肩をやさしくさすりながら、

「ぢや、左近の尉、明日からきつと鳥追ひに出かけるからどうか、この家から追出す事だけはゆるしておくれ、後生だから。」と、詫るやうに云ひました。

左近の尉は花若の言をきくと、

「どうせ鳥追をする位なら、

何もそんなに不平らしい様子なんか見せないで、始めから承知すればいいのだ。併し、お母さんより小供の方がいくらか物が分る。ぢや花若明日の朝は暗い内に仕度をして、家の門のところへ来て待つてゐるのだぞ。さうすると、俺が召使どもに命つけて、船を出してやるから。」とかう云つて歸つてゆきました。後で母子



の者は、抱合つたまゝ、泣いて泣いて泣きくらしました。

八

見渡すがざり、重くみのつた稲の穂が、うなだれてゐます。秋の風が静かにわたるとはる／＼と限りも知らぬ廣い田の面には、黄色い波が、ざわざわと立ちさはぎます。雀やおほちのやうな小鳥の群が、礫のやうにバラバラと田の上に下りたちます。遠くから、音色面白く笛や太鼓の音が響いてきます。小鳥の群は、その音をきくと、怯へたやうにパツと飛びたつて、空遠くか

くれてしまひます。少時すると、空も暗くなるやうにおびたらしい小鳥が、何處からともなくやつてきて、實り切つた田の上を下りたちます。鳴子の響や笛や太鼓の音が賑やかに河の方からきこえてくると、パツと騒がしい羽音をたて、小鳥の群はまた飛びちります。——これは左近の尉の田の有様です。



少時すると、河上から、一艘の小船が静かに下つて来ました。その船には古びてはゐますが、花若の家の定紋のついた紫の幕が張りまはしてありました。船の内からは笛や太鼓の音色が面白く響いてきます。その船の後から青い幕を張つた小船が、左近の尉の家の定紋を威勢よく日に輝かして流れ下つてきます。船の中には里の腕白な小供たちが大ぜい乗りこんでゐました。笛や太鼓の面白い節に合せて

見いさいな、見いさいな。

花若丸を見いさいな

鳥追船に乗せられて

もとの家來の田をまもる。

と、かう唄ひながら、笑ひ興じてこいで行きます。

紫の幕を上げて、花若と奥方とは、少時その船の行手を見守つてゐましたが、また涙にくれて、笛や太鼓をはやし始めました。田の上に下りた小鳥の群

は、バツと飛び散つては、また下りてきます。

九

もう收穫の時がいよいよ近づいてきました。花若と奥方とは、今日も里の腕白たちにはやされながら、紫の定紋のついた幕を張つた小船に乗つて涙ながらに、笛太鼓の節面白く流れを下つて来ました。

丁度その時、河下の港から静かに河を上つてくる大きな帆掛船が花若の船とすれちがひました。何の氣もなくその船をみると、内には立派な侍たちが大ぜい乗つてゐました。遠くの方から、風に乗つてかすかに小供たちの

見いさいな、見いさいな。

花若丸を見いさいな。

鳥追船に乗せられて

もとの家來の田をまもる。

と云ふ唄の聲がきこえてきます。その時船の袖に出

はすぐ船を止めました。

「その船に乗つてゐるのは誰だ。」と、さも待ちかねたやうに侍はのび上つて訊ねました。

「悪人のために領地を奪はれて、今ではもとの家來の田の鳥を追ふ花若です。」と怯れもせず花若は答へました。その時奥方は紫の幕の蔭から、ふと顔を露はしました。と、侍は「何、花若。」ときき返しました。それと一緒に奥方の口から

「あ、殿さまちや。殿さまが御歸りになつたのちや——花若、あれがお前の父上ちや。」

狂氣したやうな叫聲がほとばしり出ました。「お、奥か。そこにゐるのが花若ちやな。どうしてそのやうな賤しい真似をして遊んでゐるのちや。」と、何事も知らないお大名は不思議さうにきき返ししました。花若と奥方とは急



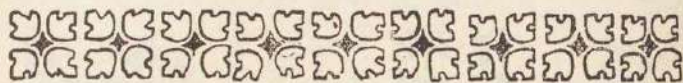
た一人の侍が、小手をかざして不審さうに凝乎つと花若の船を見つめてゐましたが、やがて大きな聲で「お……い、その船待て。」と呼止めました。花若

に気がゆるんで、わつと泣き出してしまひました。  
二人はやがて帆船に助けのせられて、久振りに  
なつかしいお大名の傍へゆきました。そして長い間  
の悲しさ辛らさをことごとくお話ししました。

「俺が悪かつた。どうぞ二人とも許してくれ。」と、  
お大名は自分の奥方と小供とに詫びを云ひました。  
お大名は都に上つて公方さまに訴訟をしたのです  
が、この邊まで噂のあつたとほり、丁度都には烈し  
い戦が起つたので、どうしても裁いて頂く事が出来  
ませんでした。その内には一年二年と經つて行き  
ます。そして何時の間にか十年程過ぎてしまひまし  
た。お大名はその間、始終花若と奥方の事を案じて  
はゐましたが、あの忠義な左近の尉があるから、と  
思つて、わづかに自分を慰さめてゐたのです。度々  
手紙を出しましたが、生憎、諸國に戦があつて、一  
度もその手紙は奥方の手には届かなかつたのです。

六二  
ところがやうやく此頃になつて、都の戦も静まつた  
ので、公方さまはお大名の訴訟をきいて下さいまし  
た。そして諸國のお大名のよからぬ事が分つた結果、  
長い間、争ひの種になつてゐた領地も自分の物にな  
つて、目出度く故郷に歸つてきたのです。

花若と奥方とは、幸が戻つてきました。大せいの  
家來をつれたお大名は、すぐ腹黒い左近の尉を捕  
へて、重い罪人として、牢に入れてしまひました。  
左近の尉のかすめた土地はみんなお大名の物にな  
りました。召使たちも歸つてきました。里の小供た  
ちはまた昔のやうに、お大名の新しい屋敷の前で  
日暮らしどのを、見いさいな。  
田が千町、畑が千町  
山が千町、やあれ、やれ  
三千町の分限者ちや。  
と、唄ひはやしましたとき。(なほり)



箒 草 (推薦)

長野 桂子

赤い夕日

狐の尻尾

畑にならんだ

箒 草

枯れてもく

狐の尻尾

畑にならんだ

箒 草

一つ目小僧 (推薦)

加藤 辰

底ぬけ提灯

ぶら下げた

街道行くのは

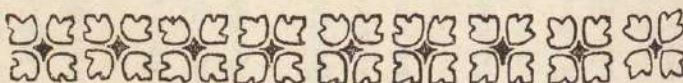
誰ちやいな

カラン コロンと

高足駄

一つ目小僧ちや

ないかいな





## 「不老不死の國」を探し に行つた王子

齋藤 佐次郎

一  
むかし、ある大きな國の真中に都がありました。そこに

で一番美しいと思ふ娘さんたちの寫眞を持つて来たから、その中でお前がお嫁にほしいと思ふひとを探してごらん。すぐとその人のお父さんに使をやることにするから。」と、かういつて、澤山の美しい娘さんたちの寫眞を出しました。

けれども、王子の方では少しも喜ぶ色がなく、  
「父さん、私がこんなに考へ込んでゐるのは、美しい娘さんを持つてゐるためぢやないのです。夜も晝も忘れることの出来ないのは、人は誰でも、王様でさへ、死ななければならぬと思ふからです。私は人間が死なずにゐられる國をみつけるまで、仕合せな気持ちになれません。それで私は人間がいつ迄も生きてゐられる「不老不死の國」を探し出すまではこのまゝちつとしてはゐまいと決心しました。」

とかう答へました。  
年をとつた王様は、王子のいふのを聞いてどんなにびつくりなすつた事でせう。どうかして王子の決心をもう一度ひるがへしたいと思つて、「私はお前にこの國を譲つて、あとを治めてもらふ事をどんなに楽しみに待つてゐた事だらう。」と幾

立派な御殿があつて、王様が住んでゐらつしやいました。王様には一人の王子がいましたが、それが並はづれて利巧な方で、ある年廣い世の中を見たいといつて、ながい旅に出ました。

それから王子は、再び父様のゐる都へ戻つて來ましたが、それからといふもの、これまでの、快活な氣軽な性質とは打つてかはつて、陰氣な、物思ひに沈む人になつてしまひました。

とうさんの王様は、大そう御心配になつて、どうかして王子の氣持を變へさせたいと、朝から晩まで案じてばかりゐらつしやいましたが、そのうちにふと思ひ當ることがありました。

それで或日のこと、夕食のあとで、王様は王子の手をとつて別な部屋へ行つて、

「わたしの可愛い王子！ お前は大変悲しがつてゐるが、長い旅をしたので、私と一しよにかうしてゐるのを愈屈に思ふのだらう。それで私は考へたのだが、お前は今結婚するといふと思ふよ。私はこゝにお前につり合ひさうな身分で、世界中

度か泣いていひましたが、王子の耳には入らないやうに、その壺朝剣を身につけて、ながい旅に出かけてしまひました。

### 二

王子は故郷をあとに幾日も幾日もの旅をつゞけてゐましたが、ある日道ばたに見上げるやうな大木のある處へ出ました。見るとそのつべんに鷲がとまつてゐて、力の限り樹の枝を揺つてゐるのです。あんまりその様子が不思議なので、王子が立止つて見てゐると、鷲の方でも王子をみつめて、地面へ下りて來ましたが、その足が地についたかと思ふと、忽ち王様の姿に變つてしまひました。

「なぜそんな驚いた顔をしてゐるのです。」と、王様がきゝました。

「私はあなたがあんまりひどく枝をゆすつてゐるので、不思議に思つたのです。」と、王子がいふと、王様は悲しさに、「私はかうしなければならぬやうに生れついてゐるので、この大きな樹を根こぎにするまでは、私も、私の一族も、死ぬことが出來ないのです。だが今はもう夕方になつたので

働かなくてもいいから、私と一しよに私の家へお出でなさい。さうして今夜は泊つて下さい。」といひました。

王子は渡れてもゐたし、それにお腹も空つてゐたので、喜んで王様のすゝめに従ひました。

鷺の王様の御殿では美しい王女が、とりさんの歸りを待つてゐましたが、父さんが旅の人と二人で来たのを見て、すぐと夕飯の支度をしました。鷺の王様は夕飯を食べながら王子の旅のことをいろいろとききました。楽しみのために歩くのか、それとも何か特別な目あてがあつての事かとききましたから、王子はすつかりの事を話して、「不老不死の國」を探し出すまでは決して故郷へ歸るつもりはないと言ひました。

「王子よ、それならあなたは、もうその國を探し出してゐると、鷺の王様がいひました。あなたは、私がいま、あの大木が根こぎにされるまでは私自身も、また私の一族も死ぬことがないといつたのを聞いてゐませんか。それまでには六百年かゝるのです。だから私の娘と結婚をなさい。すればあなたは私の家族の一人になるから、こゝで皆と一しよに楽しく暮してゐられる。六百年といへば、不老不死といつても

開けて私の寫眞を御覽になつて下さい。さうすれば地の上でも、空の中でも、風のやうに速く、王子さまの思ひ通りの處へ行く事が出来るのです。」と、かう話しました。

王子は贈物をもらつたお禮をいつて、それを内懐へ入れ



差支へないでせう。」

でも、王子にはまだそれで澤山だと思ふことが出来なかつたので、

「あなたの仰有る事はするぶん有難いことです。ですが、六百年たつてしまふと、私たちは死ななければならぬのですね。さう思ふと私は安心してゐられません。私は死なずにゐられる國を探し出すまではまだ、旅をつゞけます。」といひました。

そこで王女までが、どうかして王子の決心をひるがへしたいと思つて、切りといひましたが、王子は悲しさに首を振つてゐて、どうしても従はうとせませんでした。たうとう王子の決心が動せないのを知つたので、王女は箆筒のなかから自分の寫眞を入れた手箱を出して来て、それを王子に渡しながら、

「王子さま、あなたは私たちとこゝにゐて下さらないのですから、せめてこの箱を受とつて下さいまし。さうして、時々、中を開けては私たちの事を思出して下さい。もし不老不死の國へお着きになる前に旅がおいやになりましたら、この箱を  
て、悲しさに鷺の王様と王女にお別れをつけました。

### 三

世界中にこの小さな箱ほど役に立つものはありませんでした。王子はいくどか王女の親切をありがたく思ひました。ある晩、その手箱は王子を高い山の頂につれて行つてくれましたが、そこで王子は一人の禿頭のお爺さんが、土を鋤で掘つては穴に入れて一生けんめい運んでゐるのを見ました。穴が一ばいになると、老人はそれを他所へ持つて行つては空の箆筒を持つて歸つて来て、またそれを土を入れてゐるのです。立止つて王子が見てゐるのですから、しまひに禿頭の人は王子の方を見て、

「おい若者、どうしてそんなにびつくりした顔をしてゐるのだい。」と、いひました。

「お爺さんは何のために土を運んでゐるのです。」と、王子がきくと、老人はこんな話をしました。

「私はかうしなければならぬやうに生れついでゐるのだ。私も私の家族の者も、この山を私がすつかり崩して平にしてしまふまでは死ぬ事が出来ないのだ。だが、もう暗くなつて



来たから一しよにお出でなさい。私はもう働かなくていいのだから。さういつて禿頭の人は、傍に立つてゐた樹から葉を一枚むしりとつたかと思ふと、汚い土方の姿だつたのが、忽ち立派な禿頭の王様に變つてしまひました。

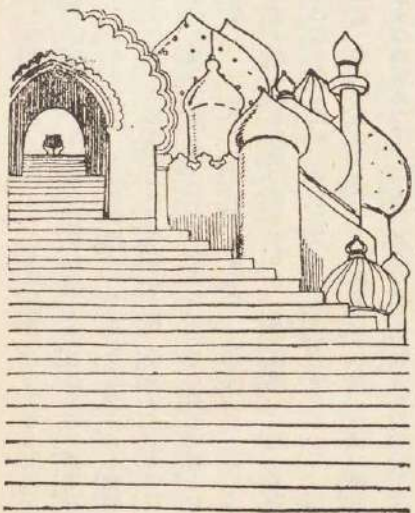
「私と一しよにお出で。」と王様はいひました。「あなたは疲れてもるようし、それにお腹もへつてゐるだらう。私の娘は夕食の支度をして待つてゐるに違ひない。」

王子は喜んでその言葉に従つて、王様の御殿へ行きました。が、そこでは外の王女よりはもつと美しい王様の王女が戸口で二人を迎へて、大廣間の中の銀の皿を一ぱい乗せたテーブルの處へ案内しました。夕飯を食べながら禿頭の王様がなぜあなたはこんなに遠くまでさまよひ歩くのかとき、ましたから、王子は「不老不死の國」を探してゐる譯をすつかり話しました。

「あなたは、もうその國を探し出してゐる。なぜかつて、先刻もいつた通り、私も、私の家族も、この大きな山が平になるまでは死なないので、それにはあともう八百年は大丈夫かかる。こゝにわれ／＼と一しよにゐて、私の娘と結婚しなさい。」

も真直に、空中をとんで行くことさへしないで、行けるのです。

王子はそれから毎日々々歩きつゞけましたが、そのうちに指輪のことを思出して、本當に王女がいつた通りの力があるか、どうか一つ試して見たいと思へました。そこで、「私は世界の涯へ行きたいと思ふ。」と、目をつぶつて言つてから、暫くして目を開くと、王子は大理石の宮殿を一面に建てつらねた町に來てゐました。



い。八百年あれば生きてゐるのに十分ではないか。」と、禿頭の王様がいひました。

「それに違ひありません。でも私はこれからまだ先へ行つて死ぬ事が全くない國を探して來たいのです。」と王子はいひました。

翌朝、王子がお別れを告げようとする時、王女は泣いてどうかこゝにこのまゝゐて下さいと頼みました。でも、どうしてもゐてくれない事がわかつたので、かたみとして黄金の指輪を王子にくれました。この指輪は驚きの王様の娘からもらつた手箱よりは、まだ／＼役に立つもので、思ふ所へどこへで



傍を通る人達はいつれも背の高い、強さうな人で、すばらしく立派な衣服を着てゐました。王子は道を行く人を引とめて、この町は何といふ町ですかと、自分が知つてゐるだけの二十箇國の言葉で書いて見ましたが、一人も答へてくれる人がありません。王子はがつかりしてほんやり立つてゐると、不意に王子の生れ故郷の風俗をした一人の男が通るのを見つけたから、飛んで行つて自分の國の言葉で、

「こゝは何といふ市です。」ときゝました。

「この市ですか。こゝは瑠璃國の都です。今は王様がお亡りになつたので、王女さまが國を治めてゐらつしやるのです。」と、その人がいひました。

この事を聞いたゞけで喜んだ王子は、女王の住つてゐる御殿へ行く道を教へてもらひたいとその人に頼みました。その人はいくつもの町を通つて、廣い辻の處まで王子をつれて行つてくれましたが、そこに緑色の大理石造りの立派な建物がありました。その前面に石段があつて、その上に女王が銀の霞のやうに光るベイルをまといつて坐つてゐて、人民のいろいろの訴事を一々きいては、裁いてやつてゐました。王子が

そこへ現れると、女王はまともに御覽になつてゐましたが、王子が並の人でないのを見たので、その日はそれで訴事をきくことを止めて、王子に御殿へ一しよに来るやうにと侍従にお言ひつけになりました。幸なことに、女王はこどもの時、王子の國の言葉を教つたことがあつたので、少しの難しい事もなく、一しよにお話が出来ました。

王子がこんどの旅の話をする時、女王は熱心に聞いておるでになりましたが、やがて立上つて王子の手をとつて、別な部屋へつれて行きました。その部屋の床には、一ぱい縫針が敷きつめてあつて、一本の針をつめる隙間さへないので、

「王子さま、その縫針がおわかりになりますか。わたしも、それからわたしの家の者も、あの縫針を一本々々刺繍につかつて、一本残らず磨りへらしてしまふまでは死ぬことがないのです。それには少くも一千年はかゝるのです。王子さま、この國にあなは留つて、この國の王様になつて下さいませんか。一千年といへば生きてゐるのには随分長い間ではありませんか。」と、女王がいひました。

「たしかに仰有る通りですが、でも一千年の終りに私は死な

ら行けるのでせう。道も、橋も、どこにも見えないぢやありませんか。でも、その市はたしかに押し廻つてゐたその國のやうに王子には思へたのです。その時ふいに、王子は瑠璃國の女王がくれた金の鞭の事を思出したので、鞭をどらせながらそれを地上に投げました。もしそれが何にも役をしてくれなかつたらどうしよう、と心配しながらも、どうかそれが橋になつてくれるやうにと願ひました。

あゝ、何といふ不思議でせう。見る間に、空中の市へまつしぐらに續く黄金の梯子が現れました。王子が梯子を上つてやがてその市の門を入らうとすると、今までに見たこともない不思議な獸が飛出したのです。王子は驚いて、とび退くが早いか、いきなり劍を抜いて、怪物の頭を幾つか切落しました。でもすぐと、その後からまた別な頭が出来てくるので、王子は眞青になつて、立ちすくんで助けを呼びました。

この市の女王がその聲をききつけて、何事だらうと思つて窓の外を見ると、一人の旅人が今にも怪物のために食はれやうとしてゐるので、すぐさま召使を呼んで、行つて旅人を救

なければならぬのですね。」といつて、王子は考へこんでゐましたが、すぐとまた旅の支度をして出かけることになりました。女王はどうかして王子をひきとめたいと思つて手をつくしましたが、いくらいつても無駄なことが解つたので、たうとうかういひました。

「あなたはこゝにゐて下さらないのですから、わたしの思出でにこの金の鞭をうけて下さい。これは、あなたのお望みの物に何にでもなる力を持つてゐるのです。」

王子はお禮をいつて、金の鞭をもらつて、また旅に出ました。

#### 四

王子がこの不思議な市をやうやく通り過ぎたと思ふと、人間にはとても渡れないやうな廣い河へ出ました。この時王子は世界の涯に立つてゐたので、周圍中はどこも河でとり圍れてゐました。さて、どうしていいか分らないので、河の岸を歩いてゐると、頭の眞上に綺麗な市が空中に浮んでゐるのです。

王子は、そこへ行きたいと思ひました。しかし、どうした

出してくるやうにとお言ひつけになりました。そこで、程なく王子は救はれて、女王のお目通りへ来ました。女王は王子を一目見たときから、王子が並の人間でないと知つたので、大そう厚くもてなして、どうしてこの市まで来たのかと尋ねました。そこで王子が、すつかりの話をすると、女王は微笑みながら、

「あなたはもうその國を探しあて、ゐるので。私は生れる事もなければ、死ぬこともない女王なのです。こゝにゐればいつ迄も死ぬ事がないのです。」と、いひました。

#### 五

王子が「不老不死の國」へ来てから一千年たちました。でも王子には、やうやく半半位にしか思へないほど早くたちました。王子は毎日仕合せに暮してゐましたが、ある晩、ふと、父さんと母さんのことを夢に見ました。と、急に家へ歸りたくてたまらなくなつたので、立朝になると女王の處へ行つて、私は是非もう一度、父さんと母さんの處へ行つて来たいといひました。女王はびつくりして、王子を見つめながら、

「王子さま、あなたは氣でも狂つたのですか。あなたの父様

や母様がお亡りになつてから八百年もたつてゐるのですよ。行つて見たところが塵一つだつて残つてゐやしませんよ。」といひました。

「でも、私は行つて見たいんです。」と王子がいつてきかないのですから、女王はかういひました。

「急ぐことはありません。わたしが旅の支度をしておけるまで、待つてゐらつしやい。」

女王は大きな寶の箱の錠前をあけて、一つの美しい黄金の壺をとり出しました。

「この壺の中の水には魔法の力があつて、誰にでもこの水をかけると、たとへ千年の間死んでた人でも、ちぎりに生返るのです。」といつて、それを王子にくれました。王子は女王にお禮をいつて、お別れをつけて、旅に出ました。

王子は間もなく、霞のペイルをまとつた瑠璃國の女王の市へつきましたが、市の様子はすつかり變つてしまつて、市を通抜ける道さへ漸く探し出したほどでした。女王の宮殿はひつそりしてゐて、どの部屋を歩いても止める者はありません。しまひに女王のゐた部屋へ入りましたが、そこに女王は手に

刺繡を持つたま、眠つてるやうに倒れてゐました。着物をひつばつて見ても、女王は目を覺しませんでした。それから王子は、ふと思出して針の置いてあつた部屋へ行つて見ましたが、もうそこには一本の針もなく、全くの空になつてゐました。王子は黄金の壺を出して、幾滴かの水を女王にかけますと、たちまち女王は静かに動出して、首をあげ目を開きました。「お、あなたでしたか。目を覺さして下さいさう嬉しい。私は随分ながい間眠つてゐたのでせうね。」といつて、女王はたち上りました。

「私が目を覺しにこゝへ來なかつたら、あなたはこゝまゝ何時までも、何時までも眠つてゐたのですよ。」と王子に話されて、女王は縫針のことを思ひました。それで初めて自分が一旦死んだ事、それから王子が生返させてくれた事を知りました。女王は心から王子のしてくれた事を嬉しく思つて、何かよい折があつたら、きつとこのお禮をするからと誓ひました。王子はお別れをいつて、それから禿頭の王様の國をたづねに行きました。

さて、その國へ來て見ると、あの高い山はすつかり切崩さ

れ、王様は地面に倒れて死んでゐて、傍には蝸と旅かごころがつてゐました。しかし、黄金の壺の水が身體にかゝると、禿



頭の王様は大きな欠伸をして、そろ／＼と起上りました。「あ、お前さんかい、またあへて嬉しい。私は長い間眠つてゐたのだらうね。」

王子が眠りから覺してやつた話をする、王様は成程とうなづいて、山がなくなつて自分が死んだ事を思ひ出して、大變に喜んで、その内にきつとこのお禮をするといひました。

それから王子は、また先へ／＼と道にそつて故郷さして行きますと、大木が根こぎにされてゐて、驚の王様が翼を振けたまゝ倒れてゐるのを見つけました。王子が二三滴の壺の水をかけると、驚の王様は俄かにばさ／＼と翼を動かして、嘴を擧げて、

「あ、私はどんなに長い間眠つてゐたらう。でもお前さんが目を覺さしてくれて、本當にありがたかつた。」といつて喜んで、このお禮にはきつと何か役に立つことをするからといひました。

六

やうやくの事に、王子は父さんのゐた國の都へ着きました。が、宮殿のあつた處へ行つて見ると、あの始終あそび廻つた



大理石の邸下はなくなつて、そこは一面の大濤と變り、大波が空へ向つて打あけてゐました。まア何といふ變り方であらう。

に向つて、

「わたしの國へ来ては、お前はもう何の力もない筈だ。他所へ行つて餌食を探して來るがよい。」

と、叫びました。

「全くその通りだ。だが、王子の足は私の國についてゐるから、それだけは私のものだぞ。」

といつて、死の神はきません。

「それにしても、半分だけは私のものです。半分だけの人間ではお前さんも私も、役に立たない。」

さういつて女王は、賭をして王子がどつちの物になるか決めたいと言ひました。死の神もそれを承知しましたから、女王は王子の身體を「曉の明星」めがけて空へ投げ上げ、この國へ落ちれば自分のもので、もし市の城壁の外へ落ちれば死の神のものにするといふことにきめました。そこで、女王は力の限り王子の身體を空へ向けて投げました。

上の方へ、上の方へと王子は飛んで行つて、人間の眼ではもう見えない程高く、お星様のところまで行きました。

「眞直に投げたかしら、」

たとへ父さんや母さんが、恐ろしい水底に臥つてゐたとしても、どうしたら探し出して生返らせる事が出来るでせう。王子は悲しくなつて、何處へ自分が行くのかさへも知らないで、市の方へさまよひながら歸つて行きますと、背後の方から聲がしました。

「止め！王子よ、たうとうお前を捕へたぞ。お前を探しはじめてから一千年になるぞ」といふ聲がしたので。と、思ふと、年をとつた白髪の死の神が王子の傍に立つてゐました。王子は驚いて救を求めました。すると、すぐ様そこへ、驚の王様と禿頭の王様と霞のベイルの女王が來て、死の神をつかまへて、王子がもう一度「不老不死の國」へ歸りつくまで、しつかり押へつけてゐてくれました。でも皆は、死の神がどんなに早く走る事が出来るか知つてゐなかつたので、王子が「不老不死の國」へ一と歩足を踏み入れたと思ふと、ぐいと背後から捕へられました。

「止め！こんどこそ俺のものだぞ。」

と、死の神が叫びました。

不老不死の國の女王は、この様子を見てゐたので、死の神

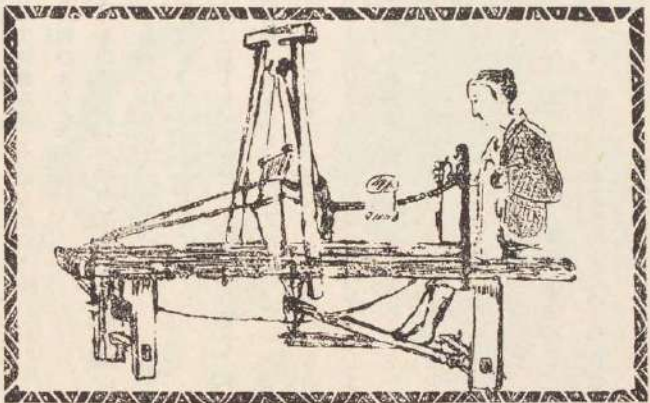
と女王は心配しました。もしさうでなかつたら、王子は市の外へ落ちてしまふのです。

一時の間もそれは長い時間のやうに思はれました。女王も死の神も、王子がどつちの物になるかと空を見つめて立つてゐました。と、不意に眞上の空の中に、山蜂ぐるみの小さなものが見えました。さて王子はまつすぐ市へ落ちて來るでせうか。

王子が市の近くまで落ちて來た頃、風がそよ／＼吹いて來て、海の方へ王子を運んだかと思へる間に、王子の身體は半分だけ城壁の方へかゝつて落ちて來ました。女王は驚いてとび上つて王子の身體を抱きとめて、お城の中へ入れてしまひました。

死の神の無念はどんなだつたでせう。そのまゝ暫く殘念さうに立ちつくしてゐましたが、たうとうあきらめて海の底深く姿をかくしてしまひました。

さて、これで王子の「不老不死の國」をたづねたお話はおしまひですが、きつと今でも王子は、この國で楽しく暮してゐる事であらう。(をはり)



「風田機織り」(賞)  
福井縣大飯郡高濱小學校第一 西本 善秀

童謡 野口雨情選

日向葵

静岡市東 駿機多味男  
草深町三

日向葵は 日向葵だ

お天道様は お天道様だ

不思議はないぞ 何故願垂れた

留守番

朝鮮元山海岸通 藤井 正夫  
吉田運輸會社

わたしは留守番してました

泣き留守番してました

お月さん窓から射したとき

ほんとに淋しくなつたけど

泣き留守番してました

夕暮

東京京橋區 達崎 愁雨  
銀座三ノ一 萬年直

お日様 忘れた

一服吸つた

煙が出たぞ  
それ出た やれ出た  
水色煙

てる坊主

神戸市相生 鈴江 八十八  
町一丁目

てるさん てるさん

てるさん てるさん

明日はお天気どうだろね

誰にも内証で

お話しよ

強情鬼

東京府下瀧ノ川 作間 博  
町中里四〇一

強情なく古鬼

ゴツンと脊中をどやされた

泣き

何んだか言つてたッけ

「人參たべたいお甘かつた」

どんぐり

伊豫國越多 八木 久子  
志津倉村

「祭の日」(賞)

東京市入谷小學校第四 村田 瑛一 郎



どんぐり落ちた

ころけて落ちた

袂にいられて

隠して食べよ

お獅子

愛知縣中島 柳田 與生  
郡一宮町

金ピカ目玉のおしやれなお獅子

金ピカ目玉は

夜露にぬれた

海月

北海道札幌區北 山本 正  
七 西二ノ九

宿なし海月は

水晶の傘

からだは 水色

ゆうらく

猿

東京市外代々 渡邊 光子  
木山谷一七〇

萬歳だ 千歳だ

脊中の太夫は

猿さんだ

一錢やるから顔お見せ

尺どり蟲

石川縣金澤 鹿田 豊子  
市河内町七

菜つばのお母

尺とりさん

何尺とつたか覚えてて

何尺とつたか覚えてて

何尺とつたか覚えてて

お寒い

鹿兒島市東千石 大石 正公  
町金光堂書店

お使ひ歸りに片町の

蕎麥屋の表はお寒い

お寝みなさいとお辭儀して

床に入るときお寒い

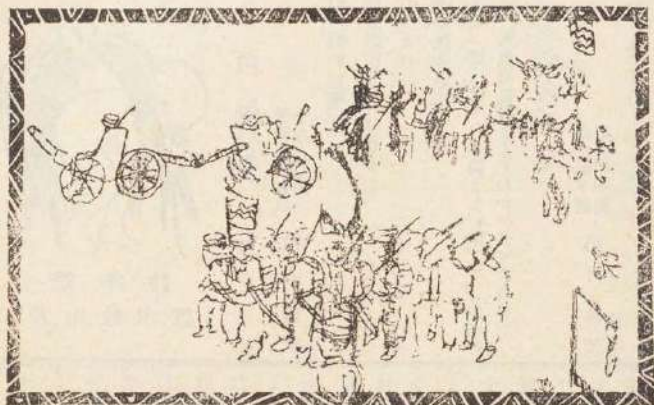
星

名古屋市東區 恒川 北斗  
車道東町一五



大正九年十一月五日の夜カア  
んの肩が張りネエヤが叩きます  
ネエヤを  
ミイチャ  
ミイチャ  
ミイチャ  
マアちゃん  
マアちゃん  
マアちゃん  
トウさんが  
トウさんが  
トウさんが  
僕  
がみんな  
肩をたよ  
ます  
その繪を僕が  
かきました  
若山旅人  
收水代書

「肩たよき」  
静岡県沼津市松原村 若山 旅人



「くわんべい式」  
和歌山市内町小学校尋四 彦坂 庸子

金星 銀星

梯子かけるから  
三年たつたら  
おりておいで  
金星 銀星

かくれんぼう

東京小石川表 燈田 山猿  
町飛脚學寮内  
健ちゃん逃げよ  
花ちゃん逃げよ  
鬼さん来るよ  
わたしは駄目よ  
蹴 蹴 だもの

柿

東京市本郷區 美町 澄夫  
千駄木町四六  
空に冷たい秋が来た  
裏の柿の木 火がついた  
一つ消した 二つ消した  
村の子供が  
来て消した

風

宮城縣立工業  
學校寄宿舎 安齋 正二  
ミンくみ山の  
大風さん  
おいらの風にも吹いておくれ

紺屋の張場

千葉縣 明石 きよ子  
子町今宮  
紺屋の張場はゆうらゆら  
白布 菜布  
ゆうらゆら  
風吹くたんびに  
ゆうらゆら

お屋さん

東京府下日暮里  
町金杉三〇四 高井 宮  
キラくお屋さん  
ゆうべも キラく  
こんやも キラく  
御苦勞様よ

綴方

編輯部選

面白い人(賞)

東京市入谷 仙石 文子  
小學校尋五  
「菜つば」菜つば屋さんですよ  
う。あたりかまはず大聲にとなり家  
がら、無遠慮に入つて來ます。そし  
て買ふとも云はないのに、「姉さん、  
ざるくざるだよ。」とせきたてま  
す。ほんたうに面白い菜つば屋さん  
で、買はずには居られなくなつてし  
まひます。  
しばらくすると、ざるに入れたつ  
まみ菜をせいぐほかし立てながら  
「安いなあ、どうだい、此の菜ツは  
は、活々して今にも飛出しさうだ」  
などと、一人ではめちぎりながら、  
ざるをおくと、やがてチャップリン  
を少し太らした様なかつこうをしな

洗ひ場で(賞)

昔狭國大飯郡高  
濱小學校高一 伊藤 作次郎  
警察署の前の洗ひ場で四五人をば  
さん方が洗濯して居る。五つ位の可  
愛らしい女の子が大きなバケツと杓  
を持つて、白い大きなキレをシヤバ  
シヤバと足もみしてゐるが、手に持  
つて居たバケツなどを下において、  
「母ちゃんシヤボン」は」と手のひら  
一ツばい程のシヤボンを母にもらつ



幼年詩  
若山牧水選

白雲(賞)

長野縣伊賀良  
小學校高一 椎名 國夫

白く白い白雲が

四方の山をぬけ出し

あつまり

廣い世界を作った。

評、實に堂々たる勇ましい歌です。作者の  
元氣な心持もよくわかります。(牧水)

波の音(賞)

山口縣下關  
市清和園 川村 喜美

あつちでもドード

こつちでもドード

いつしよになつてドード

朝から夕までドード

評、なんだかそこらで浪が立つてゐる様で  
す。いゝ歌です。(牧水)

鼠

大阪東區谷  
町三ノ四七 大塚 好之

大鼠小鼠

お釜のそばで

遊んでゐた鼠

障子の音に

逃げて行つた鼠

評、ほんとに鼠の逃げてゆく姿が見える様  
です。ほんたうに鼠を見てほんたうに面  
白いと思つて作つたからでせう。(牧水)

鳥

福島縣上川崎  
小學校高二 市川 市良

柿の木で

鳥が一匹

熟した柿を

つゝき落した

評、まっかなやつが落ちてつぶれた。鳥は  
カアカとんでつた。(牧水)

夕刊賣

東京市本郷元  
町小學校第五 内田 保三郎

て白いキレにつけて水をかけてもみ出す  
と、白いアツが一ぱいちらばつた。そこ  
へ一人のをばさんが洗濯物を提げて來  
た。皆さん御苦勞さんです」と、言ひな  
がら洗濯物を下さうとしたら、「奥ちゃん  
此處」と指さして女の子は湯をゆづつ  
た。可愛らしい人」と女の子の頭をなで  
て居る。母親が「雪ちゃん、しほれたか」  
「しほれた」と大きな白いキレを母親の手  
に渡して、自分は足にシャボンをつけて  
は水で落して喜んで居る。おばあさん足  
を洗つて上げよ」と祖母の邊に行つた。  
「雪はかしこいなあ、アハハハ」と、しわよ  
つた顔に笑みを見せて居る。祖母の足を  
洗ひながら僕が中の島に居るのを指さし  
て「何やら書いとるがな」と小さい可愛  
らしい口を開けて言つたら祖母は「字を  
書いて居なさるのや」と女の子の言葉に  
返答した。歸らう」と母親は片手に  
洗濯した物と、片手に女の子の手を引い  
て本町の方へと歸つて行つた。

三丁目の電車通の所に「チャラン／＼」  
と鈴をならしながら「ア、夕刊／＼」と  
言つて、新聞を賣つて居る十七八歳の  
男が居た。やがて、手がぐたびれたと見  
えて、新聞を擴ろけて、方々を見た。僕  
は何氣なくのぞいて見た。その中に夕刊  
賣の男は「君の年は幾つだね」と、なれ  
なれしく僕に言葉をかけた。僕はきまり  
が悪かつたが、思切つて「十二歳」と答  
へた。今度は僕が「君は一日こゝで新聞  
を賣つて居るのかね」と聞いたら、「一日  
こんな所に居られるものかね」と言つて  
ニコ／＼と笑つた。

僕はじよう談にかごにさがつて居た鈴  
を「チャラン、チャラン」と鳴らしたら、  
向ふから一人の人が來て、「毎夕をおく  
れ」と言つて、新聞とお金と取りかへて行  
つた。夕刊賣の男は「君が鈴を鳴らして

くれたから、一枚賣れちやつた」と言つ  
て、又ニコ／＼笑ひながら、言葉をつま  
けて「君は夕刊賣になりたいかね」と、  
言つたので僕は笑つて「夕刊賣なんか  
やだ」と言つた。

段々と新聞が賣れて、三十枚ばかりも  
あつたのが、十五枚位になつてしまつた。  
すると向ふに居た二十五六位の夕刊賣を  
よんで「僕はもう新聞が賣れたから、先  
にかへるよ」と言つて折から來た電車に、  
飛乗つた。電車は「ゴー」とすさまじい  
音をたて、走つて行つた。僕は何んだか  
あの夕刊賣の男と友達の様な氣がした。

綴方の文材を集める

若狭國大飯郡  
高濱小學校高一 常田 昌一

僕は子生川の下で、腐りかけた橋の横  
で文材を集めた。「ザアザア」と流れる水  
の音を聞きながら、材料を取つて居た。  
そこへ先生が「ギユギユ」と靴の音をた  
てながら、今腐りかけた橋の上へ行かれ

た。先生が「此の腐りかけた橋でもよ  
いのやで」と云はれた。あら私が綴りま  
した」とさかしげな聲で言つた。又先生  
は「柴田はうまい事をしとるわい」と云  
ひながら、あちらへ行かれた。女生は腐  
りかけた橋の上で色々材料を集めて居  
る。フト彼方を見ると澤山君が桑の木に  
もたれてしきりに材料を集めて居る。澤  
山君の鉛筆には砂懸がついて居るのか、  
しきりにねづつて居る。僕は「もうい  
かい」と言ふと澤山君は「もうい」とま  
つとれ」と云つてしきりに材料を集めて  
居る。そこへ農夫が來て「甲をもらはな  
あかんど、をかきな事を書くな」と、云  
つて車をひいて行つて了つた。やつぱり  
女生は、ヒソ／＼話しながら材料を集め  
て居る。あちらにもこちらにも、盡工のや  
うに川のはとりに材料集めが澤山居る。

朝はやく

東京市麻布  
區辨町五 井上 千鳥

あき

東京高等師範附屬  
小學校第一部二年 林

あきの空 かがやきて  
ことりはうたふ あきのうた  
うたつてはとぶ 人はいさむ

日が暮れた

東京市江東  
小學校尋六 島野 時雄

日が暮れた日が暮れた  
向うの森はねて居るやう  
草木は銀玉光つてる  
ふくろがかなしく鳴いて居る

オネドコ

東京市聖心女子  
學院小學校一年 茅野 タチ子

アサメチサマ  
ババノオネドコガ  
ムウクムク  
マモノオトコモ  
ムウクムク  
ネバチヤンノオトコモ

大

私はふと目がさめた。何時頃たらう。耳をすましてみると、遠くの方ではとりの啼き聲がした。外は未だシーンとしてゐる。と、ガラ／＼牛乳屋の車の音が聞える。ガタンと戸に何かあつた音、ア、新聞屋だ、と思つた。すると私の隣りに寝ていらしたお母さんが、床をばなれて雨戸を開けられたので、急に枕許が明かるくなつた。

「未だ寝ていらつしやい」と云はれたので私は「はい」と答へて床にもぐり込んだ。(十一月廿一日朝。)

お母様に別れて

山形市附屬  
小學校尋五 原 佐多子

私は今年の九月廿七日のお晝頃に、お母様とおわかれしました。私は學校もお晝までにして歸つてまゐりました。さうしてすぐに着物をきかへて、ステーションまでお送りしていただきました。お母様のお目には涙が光つてをります。私は泣か

八二

八月十九日 晴 (繪日記)



今日はなすをたくさん買った。いて牛をこしらへて遊びました。山形 横澤幸子

んじがして、私のこの小さいむねははりさけるやうでございました。そんな事を考へてゐる中にたうとう汽車は立つてしまひました。私はかなしく／＼あの汽

ムウクムク  
ワタシノオトコモ  
ムウクムク  
ミシナソロッツナ  
ムウクムク

おいものはつば

東京市西小川  
小學校尋五 岸邊 泰雄

おいものはつばは  
かへるの  
日がさ

空のけんくわ

東京府淀  
橋町柏木 日向 桃子

お月様とお星様とけんくわして  
お月様おこつて  
月の御殿へかへつて泣いた  
その晩雨がしと／＼降つた  
▼佳作 兎のお餅(東京 人見静子) ▼お寺の小母(宇都宮 三瓶秀子) ▼夢(東京 日向なな子) ▼米俵(青森 下田賢一郎) ▼栗はうす(宇都宮 竹内とし子) ▼雨(山梨 土橋郁子) ▼犬 長野 木村周吉) ▼小菊 福井 魚住隆二(以下通信欄へ続く)

柿取りの出来事

千葉縣印旛郡永  
治小學校高一 須藤 倉松

私は家の秀雄と共に裏山へ柿取りに行つた。柿は赤く木の間より見える。段々近よると鳥が柿の實をたべて居る。秀雄は鳥を見るやドンと一聲さげんだ。鳥は秀雄の聲に驚いたのか「カア／＼」と墓場の山をさして飛んで行つた。私は柿の木へ昇つて二つ三つもぎつて下へ投げた。そのはづみに秀雄の頭へ勢よくあた



静四 鈴木如子

つた。アツと思ふ間もなく「アン／＼ア」と泣きながら家へ走つて行つた。間もなく隣の忠ちゃんの家をききながら来て木の下まで来ると「さつきはどうし八月廿二日 晴 (繪日記) お琴を持ち出して来たところを自分を自分で考へてかきました。

八三





信 通

童話の選後に

野口雨情

近ごろ童話の投稿が澤山ふえて来ました。今月などは今までに無く澤山の投稿が集りました。女のかたの投稿も随分澤山集りました。私は、皆さんの熱心と努力を無にしないように、幾度も皆さんの作を讀み返して、随分慎重に選なしてをります。皆さんもとうそ努力して下さい。加藤辰さんの「一寸目小僧」も長野桂子さんの「籌草」も童話の氣持が出て居るのを嬉しく思ひました。掲載外の、作では、佐藤勝熊君の「酒德利」、南彌太郎君の「せきせい」、宇都秀臣君の「雀」、南久世君の「流星」、小山夢男君の「春」、千坂正男君の「櫻」、沼田一之介君の「鼠」、深本篤雄君の「甘酒」、四宮勝君の「電話」、新谷芳春君の「唐辛子」、藤井ひでの「おどろき」、高橋十成君の「八ヶ岳」

募集童話に就て

選者

今月は集つた童話の数も非常に多かつたのですが、佳作も澤山にありました。中で最も優秀な作品として千葉氏の「木の葉物語」大和氏の「鬼島」福島の「ふるふる」を



信 通 者 讀

▲此の頃は寒く成りました。あちらこちらの山の木の葉は皆ばらばらと散つてしまつて淋しゆうございます。(福島 ■シノ)  
▲十二月號の幼年詩に私の名がりましたので、先生から小英雄の月桂冠をいたゞいて喜んでをります。(愛知 ■櫻井光男)  
▲金の船がちかごろすてきによくつたてきたので僕もとうとう誌友になりました。これから一層勉強して投稿します。(神奈川県)  
▲僕はこないだの日曜にうちのお座敷で自由社の展覽會を開きました。選者は僕の見えんです。僕の兄さん上野の美術學校へ行つてゐるのです。僕が一番たくさん當選しました。それが七枚、妹が三枚、松田君が三枚、土井君が一枚、土井君の弟さんの健ちゃん一枚、これは一番よく出来たと兄さんがいつてました。健ちゃんはまだ六つです。自分が三輪車に乗つてゐるところを自分で描いたので。

局」の三篇を擧げる事が出来ました。木の葉物語」の空想は多少型に陥つてゐるといへませんが、六人の小人と美しい可憐なお姫様と美しい愛さんを想像した事は大變に美しいものです。アンデルセンの「お伽ごよみ」に似た構想の美がありました。鬼島の笛」ばかりに冗漫な書方でしたが、大變に面白い話です。「ふるふる小鳩」は純真な氣持のいいもので、その點では最も優れた作ですが、少年少女の興味をひくには語が單純すぎるのが残念でした。都築益世氏の「お人形」も同様な意味の長所と短所がありました。それで結局左の二作を推薦する事にしました。

綴方を讀んで

選者

仙石さんの「面白い人」はいゝ描き方です。葉つば賣りの男が、大變によく書いてゐます。澤山の言葉を使はずに浮出るやうに書いてゐるのには感心しました。たゞ一人の「葉つば賣り」のことを書いてゐるだけで、外のことは大して書いてないのに、自ら町の様子まで見えて来るのは、一つの事がはつきり描へられてゐる爲めです。伊藤さんの「洗場」もいい作です。大變に觀察に細やかな處があつていゝと思ひました。井上さんと原さんの二作は共に女子の作だけに女でなければ見られない優しい感情が出てゐました。しかし、どういふものか同じ様に型にはまつた處があります。井上さんの方では、朝の戸外の様子か如何にもおあつちひ向きだし、原さんののは、別れて行くお母さんに對する感じが成程と思はせる程の深みがないのが残念でした。内田さんの「夕刊賣」は活氣のあるきびきびした作でいゝと思ひます。(佐次郎生)

木の葉物語

福岡縣八幡市前田 千葉新一郎  
長野縣諏訪郡富士見村 大和左止男

鬼島の笛

向この外に佐藤勝熊氏の「黒い人外」二篇、近江谷氏の「益ちやん」石橋周一氏「金の王女」

新谷芳香氏の「目から鼻へねける人」若美静悦氏「金の棒」吉田斐哉氏「易占の話」伊藤一雄氏の「月夜の湖」等の諸作はそれゝ面白く處のある作です。

(附記、一月輝光氏の「あの國、この國」近江谷氏の「健美君」作問氏の「幸福の國へ」山

葉ばみんなあつたの紙にはつて、ペンでとめました。そして家中のものをみんなよんで来て見せました。兄さんはこんなことは誰にでもできるのだから、皆やつたら面白いことだといひました。(東京 少年自由畫家)

▲金の船の童話が蓄音器のレコードになつてゐるのですが、どんなものがありますか。そしてどこからできますか。(名古屋 細井静枝)  
▲それは一月號の廣告にもありましたとおり、十五夜お月さん、鴛さん、四丁目の犬、人買船、つばめ、などです。ニッポンホンで有名な日本蓄音器商會から出るのです。詳しくは神原川縣川崎町の同社から發行してゐる「月報」をござんなさい。(記者)

▲僕はこないだ「金の船」主催の童話劇を見に行つた。童話劇はみんなとてもおもしろかつた。中でも「はだかの王様」は一つとおもしろかつた。僕の友だちもさういつた。姉さんは「十五夜お月さん」が一つとよかつたつて歸つてからいつた。(澁谷 橋本眞吾)

▲私は日曜日に神社主催の童話劇及び童話音楽會を参りました。本居みどりさんの「十五夜お月さん」と「四丁目の犬」の唄唱にはすつかり感心しました。歸つてからもあのいゝ氣持が消えませんでした。(倭文子)

# 童謡音楽會及 童話劇會當日の模様

十一月二十七、二十八日の兩日豫告の通り丸の内保険協會に於て童謡音楽會及童話劇會を開きました。二日間とも幸に好天氣ではあり、めづらしい催でもあつたので、續々と讀者の皆さんのお出でを待て大變に盛大な會を開く事が出来ました。殊に第二日目などは、場内立錫の餘地もない程で、後からお出での方は全部御入場をお断りしたやうな有様でした。

童謡は本居長世先生が御自身で伴奏なされ、歌手は本居先生のお嬢さんのみどりさんをはじめ、外に伴みどりさんと黒田光明さんの三人が代る代る唄はれましたが、何れもいゝ曲だけに聴衆の方々を十分喜ぶことが出来ました。中でも「十五夜お月」の唄は、本居先生の率いて居られる如月社のオーケストラが出て、先生の指揮の下に演奏しましたが、本居みどりさんのふくよかな聲で、あの哀れにみちた唄がうたはれた時は、どんなに深い感動を與へた事ぞう。

童話劇では、何といつても長田先生の「はだかの王様」が大喝采でした。大勢の市民の騒いでゐる向を王様が、しかつめらしい顔して、裸で輿に乗つて行くあたり、笑はずにはゐられませんでした。五郎正宗も、物が物だけに、少年少女の方に十分面白味を與へたに相違ないと思ひます。

尚、當日の盛況を日々御報告したいのですが、紙面に餘白がありませんから、これで止めて置きます。兩日とも非常な盛況のうちには會を終る事の出来たのは、讀者の皆さんの御後援の爲めで、厚く御禮を述べます。何れ近い内にはもつと「面白い會を開いて、皆さんの御後援にむくいる積りですから、其節はまた續々とお出でを願ひます。(記者)

## 新しく出た本

◆ふるさと (島崎藤村先生著) 本誌に出た「山の中の話」や「山家の話」をはじめ、あいつつた話を澤山に集めて出たのが此の本です。是非少年達に讀ませたい讀物ばかりです。何處を聞いても子供を思ふ父さんの愛情で満ちてゐる、田舎の暮しの有様が解りかけです。色々の動物と知らず知らずの内に交友達になります。全く外に類のない童話集です。(京橋南船屋町「實業の日本社」發行定價金壹圓)

◆寶石の夢 (水谷まさる氏著) 昔さんとおなじみの西條先生の抒情小詩「靜かなる肩」を出した本屋さんから第二篇として水谷勝氏の「寶石の夢」が出ました。それは儼しい詩集で、少女達の胸にひしひしと響く唄ばかり集めた可哀らしい本です。夢に生きたる少女達にどんなに愛される事ぞう。少女の心を歌つた小唄集ともいふべき本です。(神田區南神保町「尚文堂書店」發行定價金九十錢)

◆類白の歌 (沖野岩三郎先生著) 昔さんと初識以來おなじみの沖野先生の童話集です。何れも先生が最近にお作りになつたもので、「金の船」に出たお話は別に一冊にまとめる事になつて居りますから、それを抜かした童話は全部この本の中に集めてあります。類白の歌「葉の上」「千野長屋」など、どれも先生得意の作です。沖野先生の大好きな方は是非一度お讀みなさい。實に愉快な面白い話ばかりです。(本郷弓町「日本評論社」發行定價壹圓七拾錢)

- ▲自由畫佳作 △門 (長野 宮島勇) △繪日記 (東京 木村八千代) △机と本箱 (東京 林幸彦) さんじの時間 (東京 岡島正人) △くわんべい式 (和歌山 彦坂博) △鑑の家 (大阪 吉田正五郎) △秋 (大阪 石井恒可) △お正月 (東京高橋美佐子) △山路 (埼玉 肥土喜三郎) △柿 (加奈川 加藤庄太郎) △机 (東京 渡賢) △お母さんの顔 (大阪 石井守) △電氣 (北海道 中村マユ子) △學校 (神奈川 本田ユキ子) △人 (神奈川 豊住芳雄) △海岸 (滋賀 山本佐喜知) △軍人 (北海道 相川慎雄) △オアシサン (堺 郷門三吉) △馬車 (群馬 折茂豊) △自畫像 (香川 田中友二郎) △サムライ (高知 下元兎喜雄) △オヤンキ (東京 古安徳) △愛する人形 (臺灣 重松昌也) △汽車 (長野 木村周吉) △小池 (長野 橋爪金吾) △同 (富山 佐村武彦) △海 (高岡 竹脇純寺) △電車 (京都 長野誠之助) △田 (群馬 田部井明) △かき (群馬 峯岸俊郎)
- ▲幼年詩佳作 △牛 (福井 田中健吉) △小犬 (群馬 村山正雄) △子ばち (朝鮮 佐藤義信) △つばくら女 (福井 石橋周一) △石屋さん (神奈川 加藤庄太郎) △でんき (東京 稻垣ひろし) △クリスマス (山形 原佐多子) △スノボ子 (青森 鈴木峰男) △自動車 (愛知 佐藤栄) △雪 (徳島 長田重治) △鬼 (東京 伊丹理吉) △天 (徳島 榮島武夫) △まい (こん) △福井 (福井 濱邊新之助) △方方佳作 △風子 (兵庫 常政操) △畫ま (福井 常田徳) △動物の下にて (岡山 山崎)

- △幼種園ごっこ (京都 佐野吉代) △學校の秋 (山梨 土橋郁子) △トメ子ちゃん (北海道 三宅敦) △吉自轉車 (福井 石橋周一) △芋洗ひ (同 柴田勘威) △きしや (同 埼玉 三宅實一) △町の朝 (京都 西村ふさ) △池のほとり (福井 魚淵智恵) △思ひ出 (東京 村松江上) △きのこ取り (福岩 稻永健) △清水がわら (埼玉 三宅きく子) △僕ノ妹 (東京 金丸野夫) △犬 (京都 青木絢子) △日曜の朝 (東京 松下春三) △柿の木の下 (福井 西本義秀) △でつとほうる (茨城 程塚つる) △私のおぢいさん (神戸 定川又四郎) △年の暮 (長野 木村周吉)
- ▲金の船読友 △京都 堀井祥子 △長野 河西敬吾 △京都 梅田安之君 △日本橋 伊丹理吉 △大阪 上田春色君 △神奈川 加藤庄太郎 △福井 一瀬三郎君 △山口 末廣雄君 △東京 小山義雄君 △千葉 長島卓郎君 △東京 小田きみ君 △茨城 五來高秀君 △高知 安田稔君 △長崎 福原政平君 △朝鮮 茶谷秀雄君 △北海道 古守善夫君 △鳥取 原田カナ子 △兵庫 金光敬少年少女會 △新潟 佐々木守輝君 △長野 佐々木誠一君 △東京 齋藤正夫君 △愛知 平井宏君 △臺灣 藤時富貴君 △東京 唄守耕四郎君 △福島 △岡村文君 △宮城 瀬戸祐松君 △北見 鷺見明君 △愛知 山内式彦君 △廣島 石井克己君 △東京 齋藤誠一君 △東京 武藤英輪君 △新潟 宇田松山君 △大阪 林吉之助君 △兵庫 小原基治君 △長野 久保健君 △東京 岡島正人君 (以下次號)

金の船消息

▲金の船(新年號)の發行はまづたくすばらしいものでした。ことに、岡本隆一先生の双六「寶さがし」は大變な評判で全国の少年少女諸君からいたいたした山のやうなおほめの言葉に對してあつくお禮を申しておきます。岡本先生があの双六をおつくりになつた頃は、ちやうど金の船主催の童話劇があつた頃で、童話劇の方はそんなわけです。先生に御指導を仰ぐことができなかったほど、それほど努力していただいたものでした。

▲楠山正雄先生が長い旅からお歸りになつて新しくおつくりになつた童話を金の船の三月號から出すことになりました。それは日本歴史のなかでも一ばんはなやかな英雄の物語です。いつたいその英雄とは誰でせうか。

▲野口雨情先生の童話「烏さん」(新年號)の第二聯目「親なし雛になりました」は「雛と別れてゆきました」の間違ひでしたら訂正いたしてをきます。もつとも曲謄には正しい方が出てをりました。

▲金の船童話會へ御入會御希望の方は、四谷區舟町十三番地、柳葉益世氏方へ御申込下さい。たいいてい毎月一回例會があります。

少年創作募集

自由畫……山本鼎先生選  
幼年詩……若山牧水先生選  
綴方……編輯部選

自由畫でも、幼年詩でも、綴方でも題は何でもかまひません。みなさんの見たこと感じたことを、みなさんの好きなやうに描いたり、作つたりして出して下さい。原稿には必ず學校と學年、または住所と年齢を書いて下さい。よく出来たものは雜誌に出します。なかでもよく出来たものには賞品をさしあげます。特にすぐれてよくできたものには「金の船賞」をさしあげます。

懸賞創作募集

童話……野口雨情先生選  
童話……編輯部選

童話は二十字語二百行以内、童話は二十行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として雜誌で發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童話には二圓づゝ、特選の場合には童話には拾圓童話には五圓づゝ賞金として呈します。

東京市外田堀三五一番地  
金の船編輯所

定價一冊三十錢 送料壹錢  
半年分六冊(送料共)壹圓零錢  
壹ヶ年分三冊(送料共)三圓零錢  
(新年號四月號九月號は特別號で、  
一冊三十五錢郵税一錢申受けます)  
振替口座東京〇五七貳番

(送) 御註文は必ず前金で御拂込み下さい  
金 送金は小爲替でも切手代用でも宜し  
切手代用は(壹錢切手)一割増しです  
注) 第何巻第何號よりと書いてください  
住所姓名ははつきり書いてください

廣告料は御照會次第お答  
へいたします

大正十年一月四日印刷納本(毎月一回)  
大正十年二月一日發行(一日發行)  
編輯所 東京市外田堀三五一番地  
編輯人 藤田三郎 藤田三郎 藤田三郎  
發行人 藤田三郎 藤田三郎 藤田三郎  
印刷所 東京市小石川久野町八百八番地  
印刷人 大橋 光吉  
印刷所 東京市小石川久野町八百八番地  
印刷人 博文館印刷所  
東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地  
發行所 キンノツノ社

會列陳形人難

……りよ日一月二……

本年新製の當  
店特製雛を初  
め、その他種  
々の雛や附屬  
品一式賑々  
しく南新館に  
陳列されます

春向友禪縮緬陳列

珠(春向)にふさわしい友禪縮緬  
を潤澤に御覽に供します。苦心  
になれる、よい品ばかりと申して  
もよい程で二月二十日より廿日迄

帯側陳列會

この會が古例で當春流行の  
を、わが三越から二月一日より、指出す  
で御座います。特に本年は華らしい品が  
非常に澤山に陳列されて居ります。

三越呉服店

◆◆ 日五十二月二 ◆◆◆◆ 日十月二 ◆◆ 日休定の月二 ◆◆◆◆



ライオン煉齒磨

快い匂いと

やさしい色とは、

私達の心を

楽しくします。

そして、すぐれた

効果は、私達の

歯を強く美しく

します。



大正八年十月十六日 大正十年一月一日印刷 第一巻 第一号  
（第三巻第一号） 大正十一年二月一日發行（毎月一回一日發行）

東京 キンノツノ社 發行